女鑑

明治三十三年十一月五日發兌

第貳百拾六號

國光社

女鑑第貳百拾六號

目録

稟告

從來本誌の發賣に係る事務は國光社雜誌部に於て取扱ひ居候處向後東京市京橋區南傳馬町壹丁目七番地靜思館に於て取扱ひ候事に致候間自今國光及女鑑に關する御照會、御送金、御通知等は總て必靜思館宛にて御發信被成下度候也

追て編輯に關する件は從來の通り國光社編輯部宛にて御發信被成下度候

明治三十三年十月

東京京橋區築地二丁目廿一番地
國光社編輯部

東京京橋區南傳馬町一丁目七番地
靜思館
（電話本局千三百七番）

時計は堅牢最新形實用裝飾兼備を撰ぶ
美術品は意匠卓絶製作精妙なり



從來商品は階上にのみ陳列せしが今般
階下も亦陳列場となし總て最廉の正價
を附し顧客隨意御覧撰擇の便に供す

冷泉大納言の北方



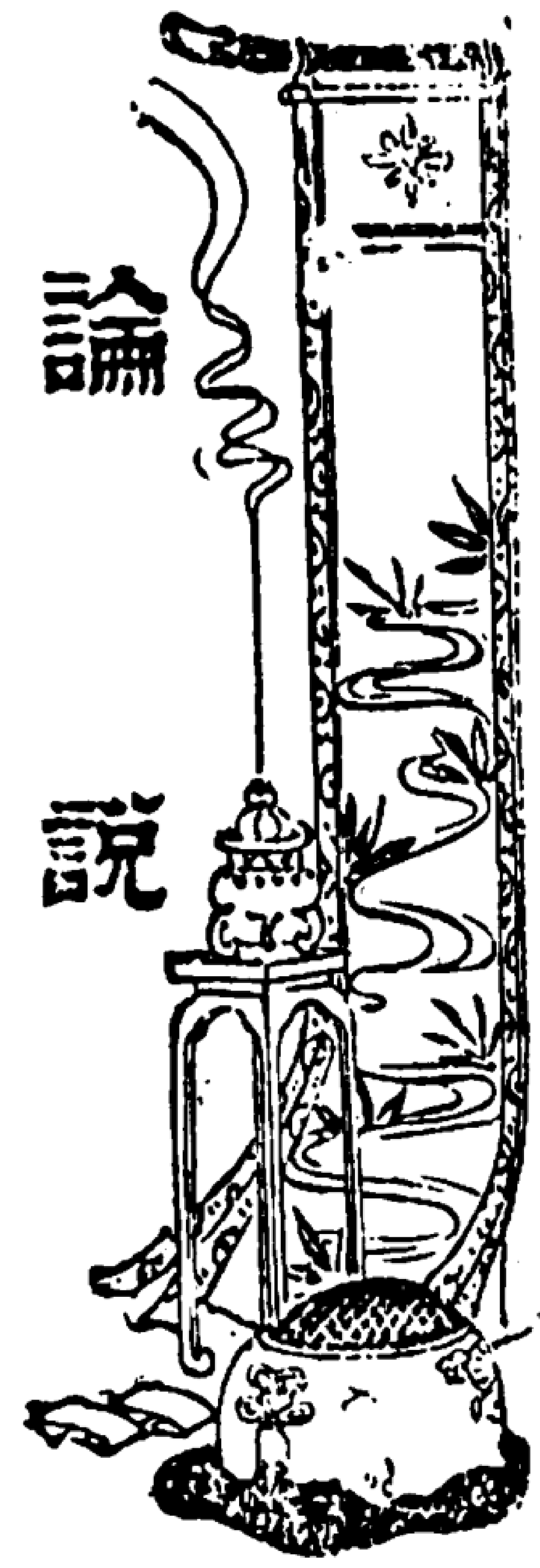
中流以上に於ける現今の家庭

天地一日も和氣なかるべからず、人心一日も喜神なかるべからず、彼の、疾風怒雨の時は、禽鳥も戚々たるに、霽日光風の折には、草木さへ、猶且、欣々たるにあらずや。如何に、況や、萬物の靈長と稱せらるゝ人においてをや。

朝に露をふみ、夕に星を戴きて歸るところの農夫、木片鐵屑の間に、夜より夜にいたるまでも、身を投じ、兀々として、其の業に從ふところの職工等が、日を重ね月を越え幾年の間、甘じて、同一の勞苦を敢てするものは、ひとり朝夕の米麥を得んがためのみにあらず、あながち、用ゐるところなきばかりの巨額の金錢を蓄積せむの慾望のみにもあらず。實に、この和氣、この喜神、よく其の勞苦に堪へしむるなり。眞情をさゝげて家政を所理する妻の前にありて、無邪氣なる愛兒と共に嬉々する時、何者か、農夫職工の業あらむや。また、誰か、貴顯紳士と、

其の所謂地位の高下をいふものあらむや。この際にあたりては、彼の紳士と稱する人も、農夫職工といはるゝ人も、均しく、天地の和氣を樂み、自然の至樂を味ふところの高潔の士たるあり。人は、よく、裏店者といひて、之を蔑視すれども其の家庭は中流以上の家庭に於けるよりも、寧ろ、和氣靄然たるを覺ゆ。

勿論、裏店に於いて喧嘩好の夫婦ある如く、中流以上に於いても、平和にして美ある家庭を有するものも、亦、尠からざるべし。然れども、通例紳士紳商といはるゝ人々の家庭を見よ。或者は、あまりに峻嚴にすぎて、家人は、皆、疾風怒風の時に於ける禽鳥の如く戚々たり。或者は、また、あまりに放恣にして、却つて家庭の和樂あるものを知らず。或者は、たゞ、自己の慾情を充さむとに專なるがために、一家をして、常に、疾風怒雨の後に於ける草木の如く憂々たらしむ。嘗つて、和氣あり、喜神宿れりとは見えず。願ふに、彼等は、財貨を利用するよりは、先づ、其の賤貨のために蠱惑せられたるあり。一家の主人主婦たるもの、猛省せずして可ならむや。



論説

泰平の良婦（下）

三輪田眞佐子

凡そ貞婦となるは、尼とならざるも可なり。身は出家にあらざればとて、心の淸淨なるものは解脱するものと何ぞ異ならん。亦孝子となるも、家の貧苦を條件とするに足らず。巨萬の富を有する良家の子女も能く父母の心を安んずるものは、孝行の極といふべし。勉學も强ち絶食徹夜に限らず、無用に光陰を浪費せず、身體を害せず、損傷せず能く成功するを以て良しとするごとく、女子の道は貧困不時の時にのみ現はるゝものにあらず、故に讀者は泰平時代に於ては、良婦たることを期すべし。泰平に於て、良婦たるを得るものは、萬一の時に臨みて烈女名婦たるは難からざるべし。

古人曰く、慷慨赴レ死易從容就レ義難と實に然り。凡そ死は、凡人の重とするところ、義は君子の尊ぶところなり。否、凡人といへども、時とすれば生を棄てゝ、死を取ることあり。彼の良人を怨みて、水に投じ、世路に迷ひて、自ら縊る、例は、日日に聞くところなり。況んや、社會上流の婦人にして、良人と死を共にし、身を犧牲にして、父母を安んずるごときは、さながら長者のために枝を折る類にて、いと易し。されど家富み名揚り、位勳ある分限の家庭に住む女子にして、終始一貫して、貞道を踏み、孝道に戻らず、義理人情を心得て、下を待つに慈あり、上に對して禮ある良婦となるは難し。如何となれば、身をつみてこそ、

人のいたさを知る世の習なれば、泰平の時代と安堵の位置を有する婦女は、比較上恕てふ徳に乏しき傾あれば、おのづから、義理人情にも、迂きを以てなり。されば、かゝる分限の女子は、朝な夕な、我が身を省みざるべからず。

これを以て、女德を說きて、女生を導く當局者は更なり、生徒自らも、敎科書などに見ゆる烈女名婦が、千歲一遇の事變に接する業跡のみを以て模範とするは、惡しきにあらざれども、適當にあらじ。おもふに無邪氣の少女は、偶々われも貧なりとせば、かゝる孝行もせん、良人戰死せば、歌をかき置きて尼ともならんものをと、心に誓ふらんも、如何せん。かゝる事變は、萬人の身に萬起るべきものにはあらず。唯萬人中僅に逢ふべき不幸なれば、女子たるものは泰平の良婦たるを、第一要義と覺悟し、次に千歲一遇の事變に接せんも、女德を破らざる決心あらずんばあるべからず。

或人曰く、つね〴〵千歲一遇の事變に接して、正路を步む覺悟あれば、日時の業作は、物の數かはと。おのれ思へらく、日時の業作に欠點ある如きものなどが、非常の事變に接して、女德を全くするを得ん。況して傳說のごときは、奇に失し、小說風に流るゝを以て、實踐し易からざるものあるは、識者の認むるところなり。由りておのれは、道は邇きにありとの孔夫子の主義に法とり、泰平の良婦を以て、先づ讀者の要義とせよかしと、祈るなり。されど、事變に處する女德をも忽にするにはあらず。この區別を誤解するものなくば幸になん。

理想の嫁

欣翁

近來、理想といふ語が大分に流行でござる。理想の婦人とか、理想の少女とか、隨分と御名論も承はつたやうだが、拙者のは、さやうな六ケしい議論ではござらぬ。實のところ拙者の三男が、最早追々年頃になるによつて、一二年の内に、嫁を迎へてやらなければならぬ必要が出來たからのことで、なか〳〵に、他人の世話どころではない、全く自分の一家に關する話でござる。先づざつと思はくをいうて見ることに致さう。

一先方の財產……は、此方のより劣りて居るがよし。非常に困窮でも困るけれども、先以て、かなりに日々を暮して居れば、それでよし。

一先方の家柄……は、目下世間に幅が利くとか利かぬとか、さやなことは、一向にかまはぬ。又何爵とか、何位とかは全く御免、只々筋目の正しき家にて、成るべく、舊家名家といふのが欲しいと老妻とも毎々話して居る。

一嫁の敎育の程度……は、高等小學を卒業して後更に二年間位、小學校以上の敎育を受けたものが欲しいと思ふ。……そして、學科上の智識を授くるよりも、嫁としての躾方に重きを置かれた學校で、敎育されたものが企望である。……學者風の娘と女敎員志願のレデーは、全くの御免である。前に言うたやうな學校ので無ければ、むしろ小學校の高等科を卒業したばかりでよろしい。

一學校は兎に角として、裁縫のわざと勝手向の世話、即、今時の語で云へば、割烹に上手でなくてはならぬ、又た家計簿記だけは、是非とも善

く了解て居るものでないとならぬ。この三科目が嫁としての學問には、何よりの必要である。

一嫁の容良……は美いのに越したことはないが、美人の氣質といふものは大抵外面にばかり向つて居つて反省の徳に欠けて居るやうだから、美人でなくとも、不具者でさへなければ、他のヶ條がよければ、むしろ、その方が、兼々主觀的に出來て居る悴の氣には入るだらうと思ふ。

一餘り充分を望むも、如何であるが、是も理想を云うて見るまでだ。婚禮の晩に、嫁の荷物に……琴が一面と、樂訓一部と……を持て來るやうなのであつたら、どんなに喜しいだらう……學校で習つたのなら小さな風琴でもよろしい。………また樂訓ぐらゐ女の讀むに善い本も少ないが、今時の女子には、讀む者が、甚、稀なやうになる。………樂訓を持て來るやうな嫁なら、必花木を育てることや、野菜を作ることも好きに違ひない。その氣心が有りさへすれば悴から見習つて、二人で美しい庭前を作るであらう。………可愛い孫が、そのあたりに七草千草の唱歌でも歌つて遊ぶやうになり、その椽先で、茶でも入れやうものなら、それはほんとに仙人の世界であらうに。

一まだ〳〵、嫁の資格に大切なことが、今一ヶ條殘つて居る。それは、外でもない、身體の健全といふことでござる。なんでも、健康な者でないと、それこそ家庭の和樂、一家の幸福といふとを、殆んど全然亡失してしまふのである。他の個條はよくとも、此の一條に合格いたさぬと自分方の嫁には到底所望致さぬ心底でござる。

欣翁は何の處の人なるを知らず、但、この投稿に云ふ所の新婦の資格に就きては、吾人頗る意を同する者あり。是れ當今品性高尚なる士人が、要求する所の良妻の資格を代表するものと見るも可ならむか。まさに世の學窓に眼勉せらるゝ孃たちの、一讀精思を値するものと信するまゝ、こゝに掲ぐることかくなむ。

編者識



勅語要議（承前）

東久世通禧謹述

謹みて按ずるに、臣民、能く父子の親、兄弟の友、夫婦の和、朋友の信、此等人倫の要素を修めて、以て、皇運を扶翼し奉り、忠孝の全からんことを求むるには、先、此の要素を、身に修め行はざるべからず。而して、此の諸徳の實踐は恭儉の二者を以て全うすることを得べきなり。此の二者は、實に人生品行を規正する基本なり自、謙して、他を敬ふにあらざれば、世に處し人に接して父祖の遺業を行ひ、以て、名譽を保つべからず。用を節して、財を足らすにあらざれば、父祖の遺産を守りて、家名を辱むることなく、以て、慈惠の道を全うすべからず、恭儉は、實に、品行の大本なり。親を愛する者は、敢て、人を惡まず、親を敬するものは、敢て、人を慢らず。節儉、以て、用を足らす。濟窮の法、是に於てか施すべし。

夫、父子、相愛し、兄弟、相親しむは、情、之より深厚なるはなし。其の深厚なる情を以て、之を、他人に及ぼし、廣く、一國天下に及ぼす。之を、博愛といふ。我が親を愛せず、我が兄を敬せずして、他人の父母兄弟を敬愛する、之を、悖徳といひ、非禮といふ。博愛の意義を誤解して、悖徳非禮に陷らば、我が國體は、大に毀損せらるべきなり。

人の靈性を啓發し、智德の圓滿を期せんには、

もとより、學によらざるべからず。學に、藝術百科の學あり。其の養ふ所一ならざれども、純正至良なる心意の性德に包容せられて、始めて、其の用を全うすることを得べきなり。夫、人、諸種の才能技藝ありとも、苟、其の德に離るゝことあらんか。偶以て、世を紊り、人を害するに至らん。之を眞の才藝と云ふべからず。又、心性至善なりとも、之を、物に及ぼして、人たる本分を全うするに足るべき才智なからんか。是、德も、德とするに足らず、却りて、人たる道を缺くに終らんのみ。故に、智德は、二にして、二ならず、一にして、兩面ある者のみ。德を離れて、智なく、智を離れて、德なし。苟、德を離るゝもの、是智にはあらざるなり。名づけて、之を、奸邪といふ。

世の所謂、智育、德育とは、同一體に就き、之を分説する爲の名にして、固、別體異物にあらず。然るを、其の名を以て、其の實を別たんとするを以て、輕重を論ずるに至るなり。又、夫の智の區域は、宏大にして、德の範圍は、狹少なりとの説の如きも、亦、智德を別物とするより生ずる偏説なり。夫、德とは、萬善を包有する名にして、德外、又、智の區域あるべからず。德中に智あり。是、智は、德の、常に、包括せる所なればなり。彼の漢土に、明德といひ、或は、舜に、それ、大智といふが如き、智の一を以て、德といひ、智の一字以て、聖人の德を稱せるもの、其の義を盡して明なりと云ふべし。若、智にして、離るゝことあらんか。狡黠姦邪となり、道鏡、將門の、非望を企てしが如く、高時、尊氏の、悖逆、六十餘州を、暗黒の世とせしが如く、其の害毒の及ぶ所、底止すること

なからん。世間、何物か、害悪の、之に過ぐるものあらんや。陛下至仁、夙に、此の弊を憂へさせ給ひ、聖諭を以て、之に明示せさせ給へり。敬愼せざるべけんや。

抑、成德の人を　上に擢用せさせ給ふは、皇朝、古來の政典にして、古昔、　天智天皇の人材を用ゐさせ給ひしとき、先、德望、世に超えたる藤原鎌足を登用して、内臣とし、學校を興し、禮儀を定め、尋いで、文學、明經、兵法、刑律、醫術の業に明なる者を採用せさせ給ひしかば、天下、之が爲に、謠を作せり。その謠に曰はく、

橘は己が枝々成れゝども
玉に貫くとき同じ緒に貫く

と。是、橘を、玉として、一緒に貫くときは、枝々異なるものも、一に列りて美しきこと、譬へば、種々の異る處あれども、之を、同行に列ぬるときは、其の濟々たる多士、同じく、皇上の翼となり、朝廷の光輝たるが如きことを歌ひたるものならん。苟、一技一藝に熟せば、其の心思如何を問はず、皆、以て、　皇上に奉仕して、其の職を濟すべしと思ひ爲せるは、大なる謬誤なり。深く、聖諭の大旨を敬愼せざるべからざるなり。

冷泉大納言の北方

田山とり子

冷泉大納言隆房卿の北方は、小松内府重盛公の妹なり。よろづに情ふかく、歌文章の道にさへうとからざりしが、とりわけて、琴には堪能の聞え高かりき。父の太政入道、性質粗暴しかりしに似ず、

ことのほか、琴を愛して、秋風、鈴虫、唐、琴溢といひて世に寶と稱せらるゝ四張を藏し、西園寺の名主、閑院の少將、當麻の紅葉、堀川の侍從とて、當時、四天王にかぞへられたる琴の上手を召して、彈せられけるが、この北方の、村雲といへる琴を調べらるゝ時には、入道はじめ列み居る人人、いづれも感歎の聲をとゞめあへざりきとぞ。

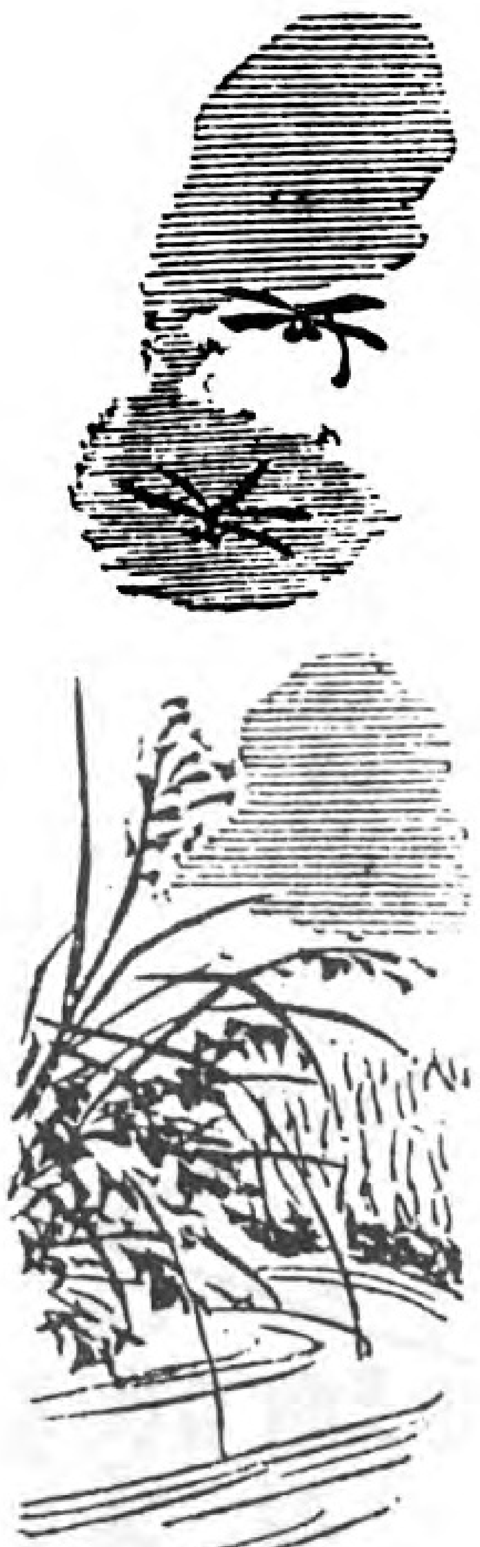
さても其の後、平家一門の威勢猛になりて、日本の半を其の領地とし、官職の大方は、其の一族にて之を占め、車馬邸宅の華美は、見る目もまばゆく、詩歌管絃の宴樂は夜と日と相つぎ、太政入道の如きは、相應しからぬ桀紂にさへ比せられて、誹謗の聲喧しかりしかば、この北方、いたく之をなげきて、折をうかゞひては、父入道を諫めけるが、聽かれず、遂に諸國の源氏蜂起するに至りぬ。かくては、家の行末いとおぼつかなしと、心をつくして、貧しきを救ひ、あやふきをたすけ、あはれみをたれ、人を惠み、種々の善業を積みぬ。猶、上を凌ぎ奉りし罪、下を虐げし惡の、萬一をだに償ふに足らずとて、心のかぎり父を諫め、兄弟にはかりしが、其の甲斐なくて、一族、皆、壇浦にて亡びけり。然れど、この北方の末のみは、源氏の世に遇ひても、猶、いと榮えて、子孫も數多おはしきとぞ。

つや女

高雄松子

信濃國の孝子龜松が、幼なき身をもて、狂へる狼が、父にをどりかゝれるを、打ち殺しゝ譚は、はやくより、誰知らぬものも無き、世のもてはやし草なり。こはまた、か弱きたをやめの、龜松にも

劣らぬばかりの眞勇をあらはし、美談あり。出雲の國秋鹿郡成相寺村の百姓七郎右衛門が娘に、つや女と呼べるがありけり。寛保二年彌生の始めつ方、其の娘の母、木立繁れる端山邊に桑の葉をこき來とて出でたるが、程もあらずかなしうさけぶ聲の聞えてけり。兼て孝心深く常に兩親の事、なにくれと心に掛けつゝあるつや女、すは母の上に一大事こそ起りたんめりと。とるものも取敢へず、えばら笹原かきわけて、直さまに走り寄れば、横腹の骨數へるばかり瘠せたる狼、鋭き眼大う見張りて、ぬけさまにたふれたる母の細頸に、むッつと嚙みつき、足ふみはりて、山をも動搖さんばかりうなり聲してありけり。あはや母が玉の緒は、またゝくひまに絶えなむとす。そを見るつや女、いかで猶豫すべき、我が身を打ち忘れ、ひらりと、其の脊に打ち乘りて、しかと兩の耳を取り、力のかぎり振りまはせば、狼いたくたけりくるひて、あはれやつや女は、左右の肩さきにかみつかれて、鮮血腕をつたへて、淋漓と流れ出でたり。かかる所に七郎右衛門あはてふためきかけ來りて、狼の咽に棒つきいれて、遂に打ち殺しけり。なゝかゝる目ざましき事の領主に聞えてければ、なゝめならず、感賞せられ、褒米そくばく賜りたりとぞ。たゞ口惜しかりしは、彼の母子二人、遂に狼の毒氣にて、其の年の六月ばかりみまかりにけりとぞ。





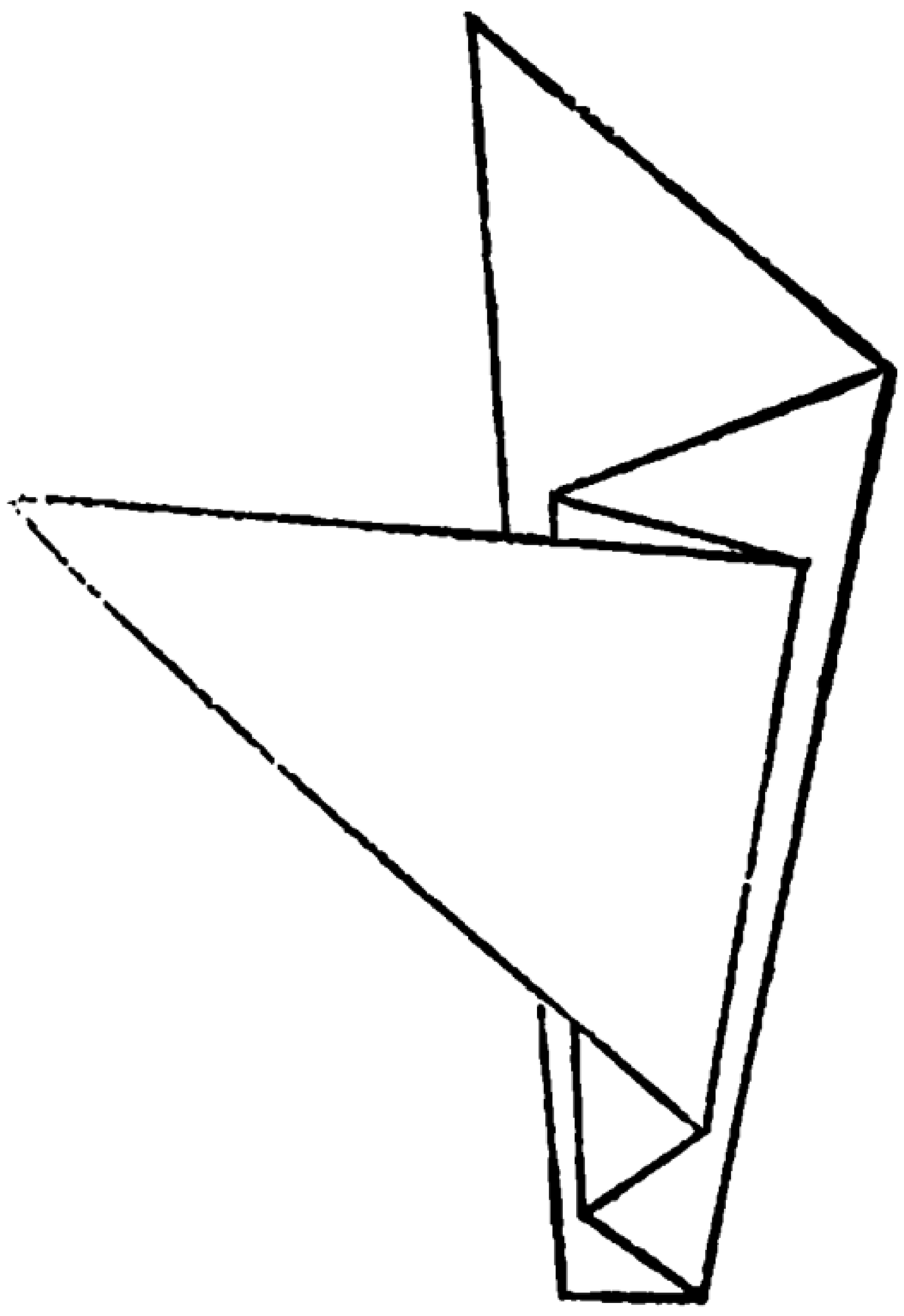
家政

折方

銚子雄

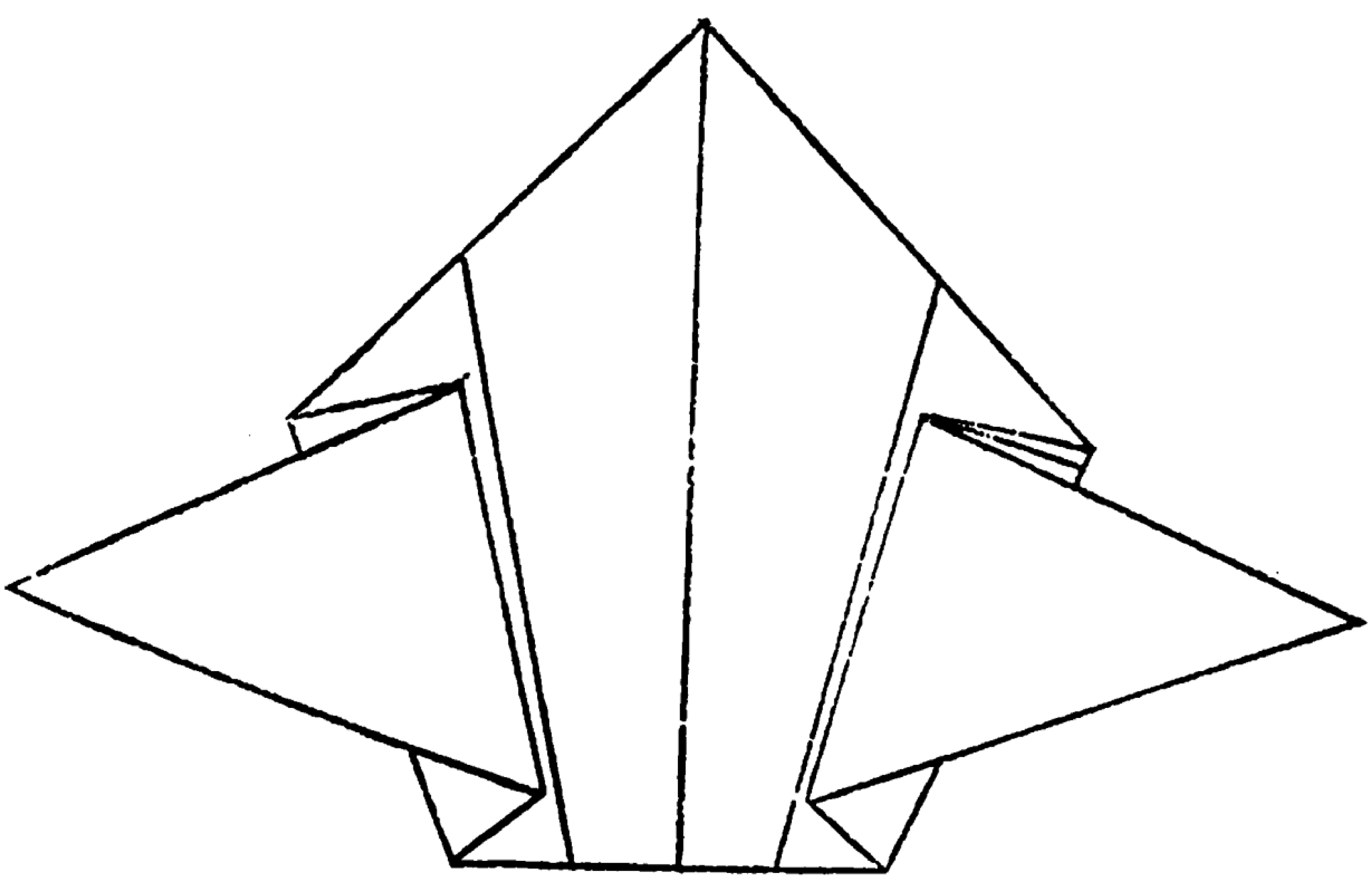
有住くわう子

(上折り)



これは、下に巻く、紅白二枚重なり。

(下折)



茶の湯

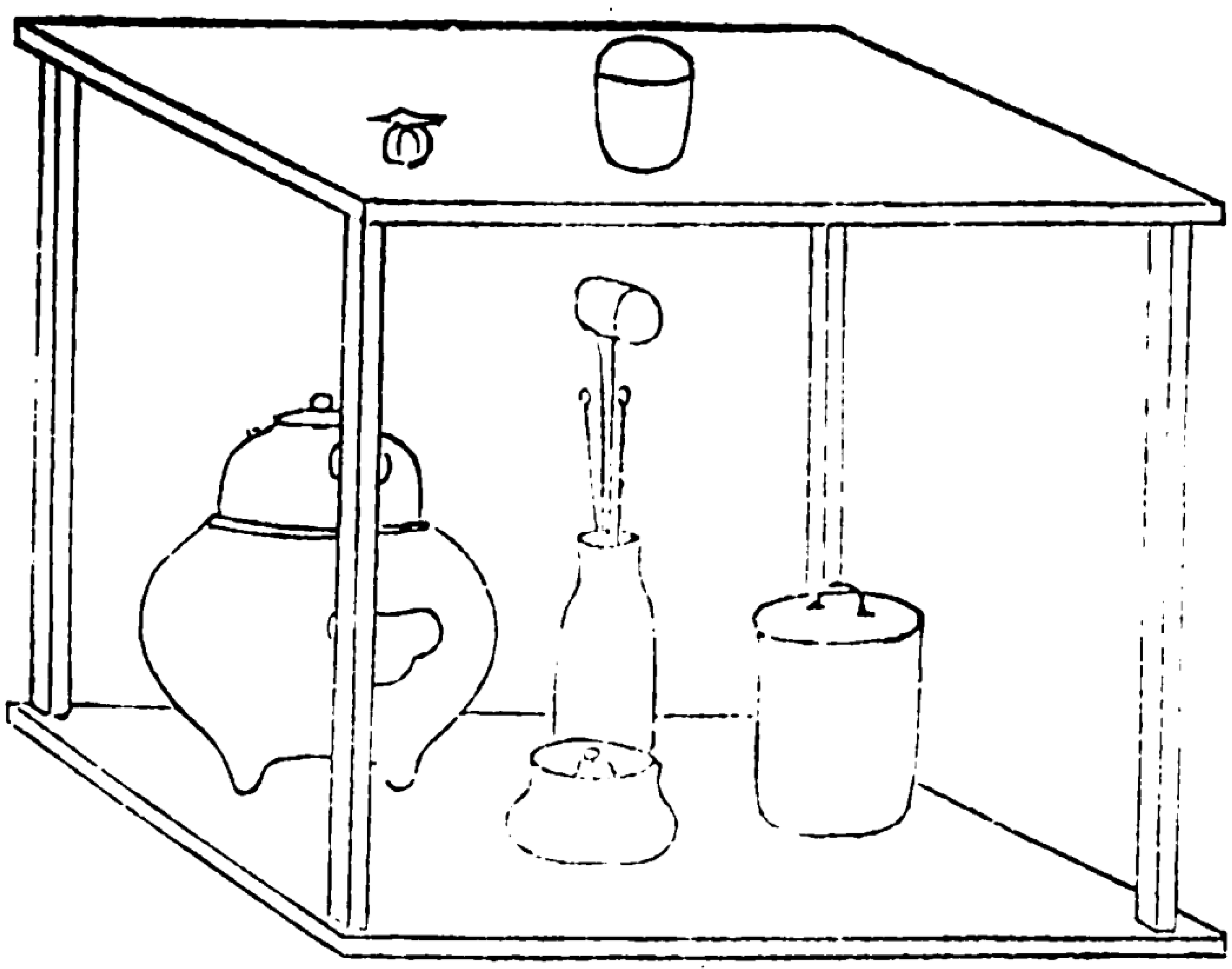
茶禮初學

孤峰庵碌仙齋不羨
關　葦　雄

眞臺子諸飾

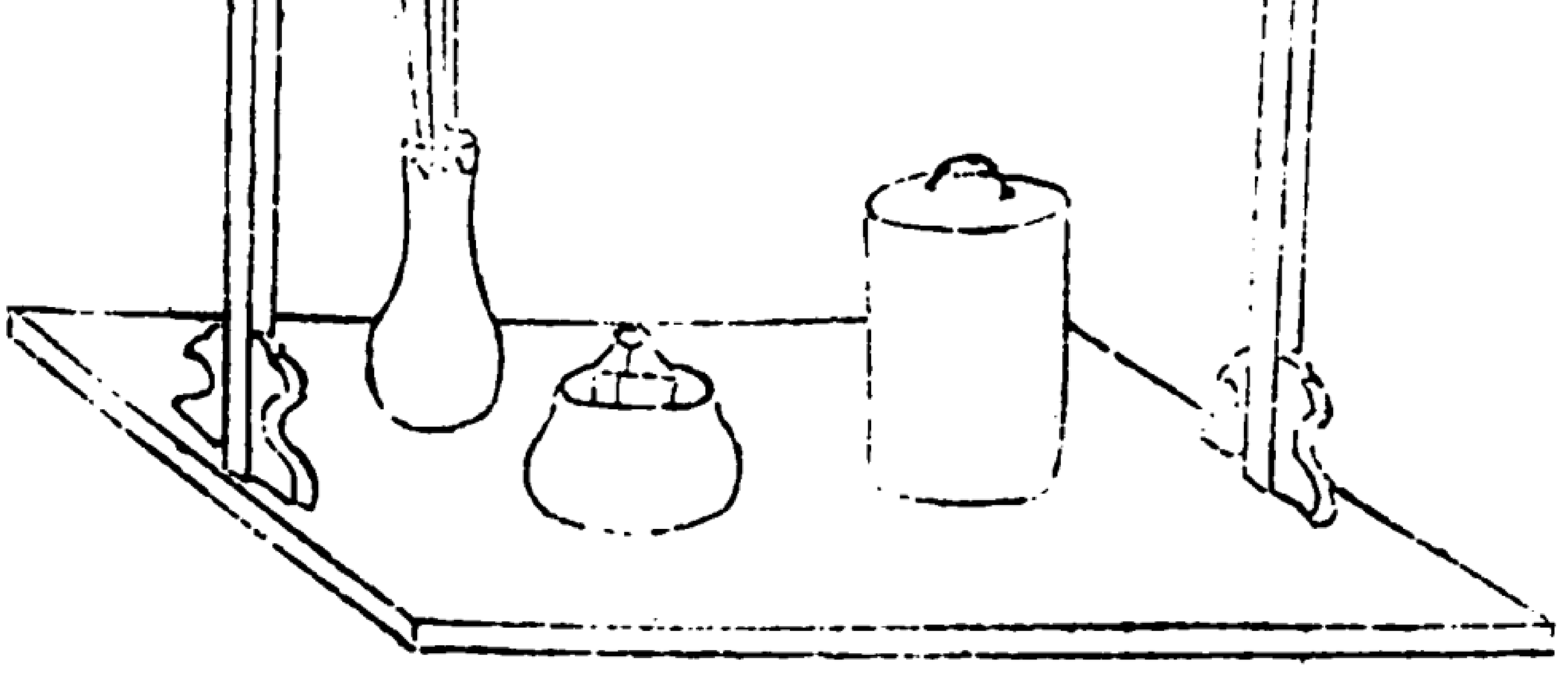
不羨曰く本行眞臺子は、鄭重にして立派なるものなり。諸流共に、是の點前を奥秘しとす。雖然、草の點前は、平常無差問用ゐてよし。書院、或は廣間の事たるべし。縦令平素といへども、愼で臺子に向ふべし。高尚氣高殊更靜にして、假初にも輕卒になすべからず。臺子に向ひたらば、茶碗茶入置合、先傍頭に火箸を拔、地板の左の方へ左手にて置べし。而して、兩手にて建水を卸し、例の所に置、蓋置を取柄杓立の前へ置付け、身體を能調へ、精神煉、呼吸を鎮めて、一禮して、點前に掛るべし。風爐の季節には、中蓋中仕舞無之故、大に仕易き場合もあれど、爐の季節に中蓋中仕舞ある時は、手數非常に多く相成間違ひ多く相成ものにて、成立上困難なり。修業練磨の上ならでは、臺子には掛り憎きものなり。爐に對する居前は大目なり。又客付の方、前の柱上より三分の一下りたる處へ、帛紗を結び付る事あり。是を蟬結と云ふは、樹に蟬の留り居に比して云事なり。結び付方は、腰間より取り、上部を引立、三つに折、左右の手にて、柱の向より右の方へ取り、前にて左を高く、一つ既に結ぶ時に、右の手の方を狹みながら折返し締付くべし。柱の途中に留り有迄にしめる樣にすべし。又是を登り龍とも云なり。

形ちより云時は、實に是も最もある名義あり。
茶點る時、是を取はづすには、左手を一呼吸先



眞臺子風爐飾
天井薄茶入地
板風爐釜水指
杓建內ニ柄杓
火箸建水內ニ
蓋置又蓋置斗

方を引べし。自から解る故、其の儘右の方へ取
り、前へ持來り、此の場合に左手は、引と直に帛



及臺子爐ノ時
總飾天井茶入 茶椀
地板水指
杓立柄杓火箸
建水內ニ蓋置

紗を一篇諸手にて引張り、二個に折り、左手に持
ち、左の腰間に、男は下より婦女子は、帶の上よ

に出し、帛紗結付有、則、其の帛紗の所は向方
より輕く添へ、右手にて折返し、狹みたる短き

り差狭むべし。臺子を點るには、茶椀運び來り、假置して天井の茶入を卸すには、手屆き兼る場合には、座居したる足を深く重ねて、茶入を卸し、同器を置付たらば、足の重ねを直し、茶椀を取て、置合すべし。是、一ッの習ひ古實、則口傳也。手不屆迚、忽ち尻を上げ手を出すべからず。容位卑劣に成て、大に面目を失墜するものなり。此の邊の事に注目するが茶道の禮式、則、躾抜と謂ものなり。茶入卸す時斗に無之、點仕舞て、茶入を上るときも、又然り。足を重ねてすべし。

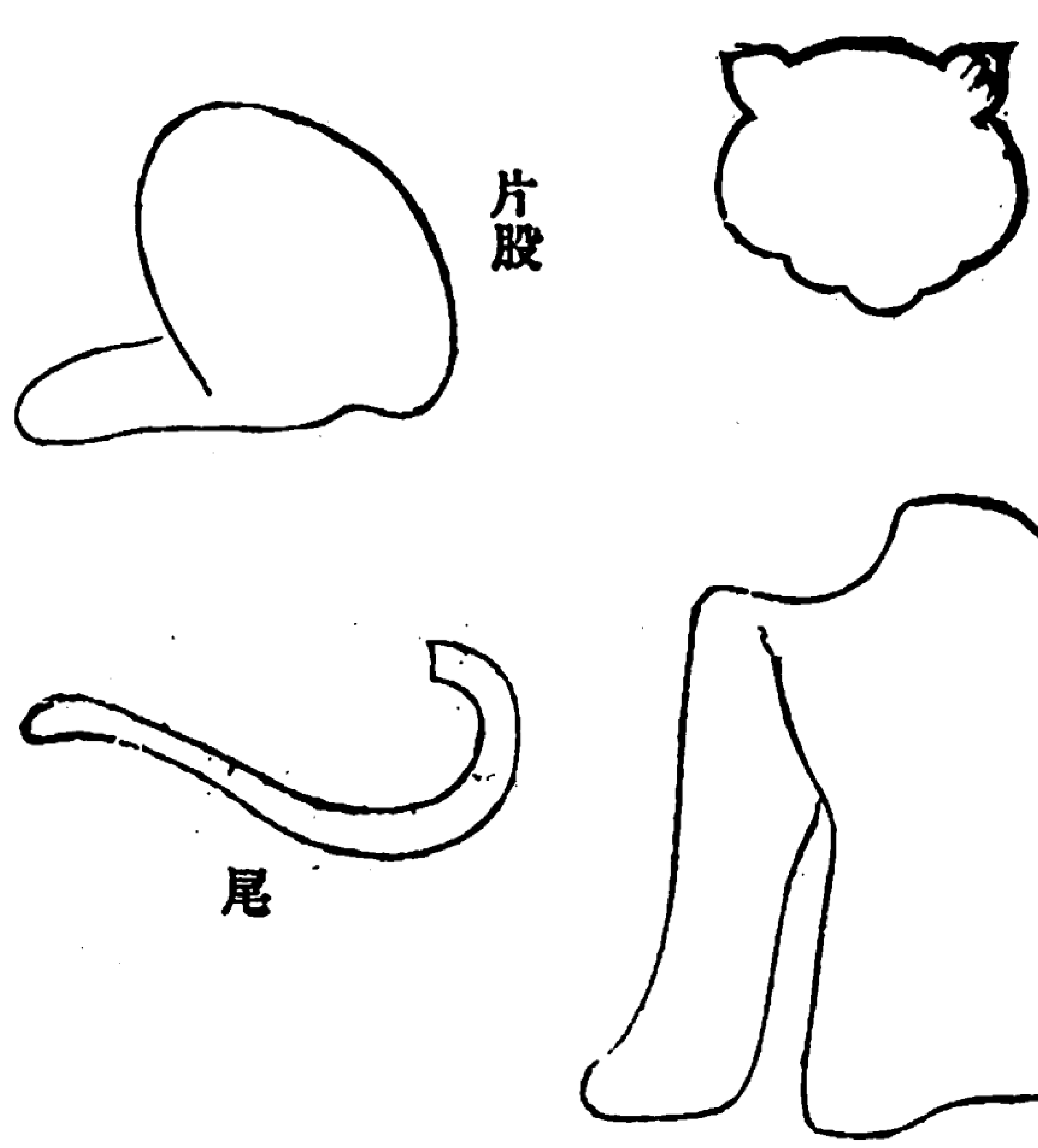


たちぬひ

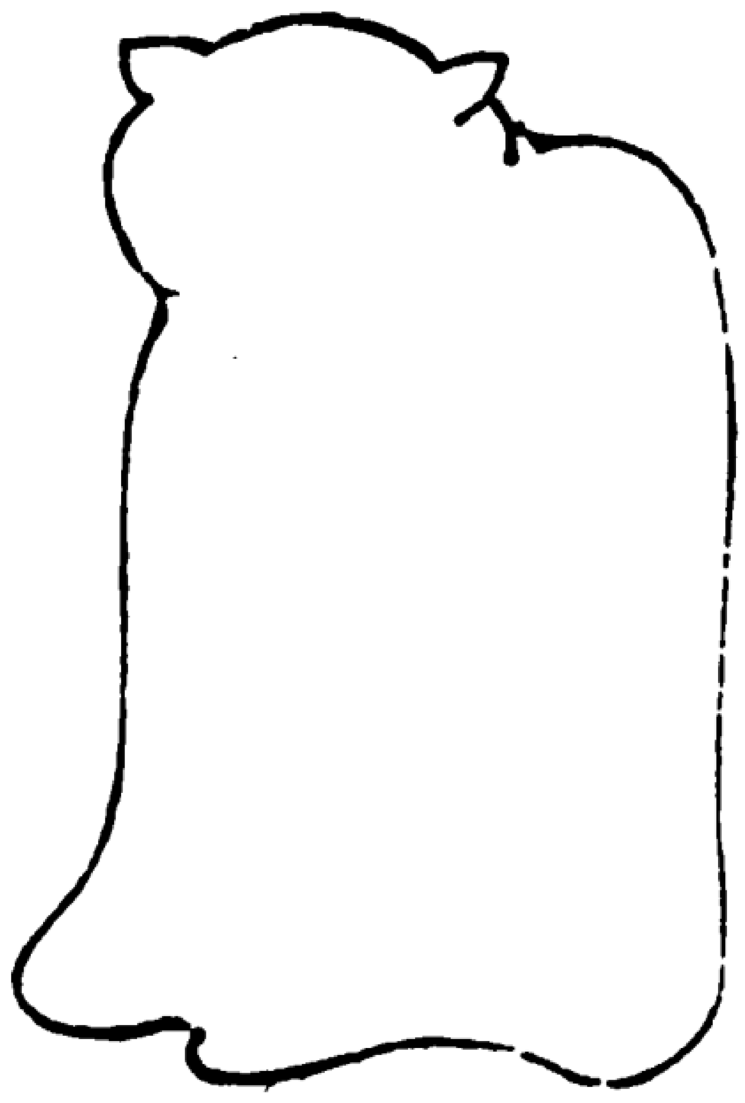
匂ひ袋（つゞき）

西山たい子

虎の形



右の圖の如き形に厚紙をたち、綿に匂ひをくるみたるを入れて、切を被せ、左の圖の如くくみ合すべし。但し尾には綿を入れぬなり。○また、今更に云はずとも、承知せらるゝならんが、首の下、股の下等の二重に重なる下は、はりつけし切を裏側にかへさず、切りたるまゝになしおくべし。また、裏をも厚紙にて、上圖の如き形に切り、之に＊



＊も綿を入れ、切を被せ、さて、表にはり合すべし。その合する前に、紐をその間につけおく事例の如くにすべし。表の切は、黄色などがよろしかるべし。それに目鼻、斑等を書くべし。

その圖



だいどころ

玉葱料理

玉葱の皮を去り、小口より薄くきり、ゆでゝは絞り、ゆでゝは絞り、二三度水を變へゆでゝ、臭味のぬけたる時、鷄卵をゆで、黄身ばかり少さくきりて、食鹽を加へ、中にいれ、玉葱と黄身と能くかきまぜ、味淋の煮きりに酢を加へ、鹽梅したるものをかけて用ゐるべし。

又、玉葱の上皮を去り、二三分程に輪切になし、三四十分間、鹽水に浸し置き、引あげて牛乳にて煮あげ、器に盛り、上よりバタをかけて食すべし。
又、玉葱をきりゆでゝ、牛の脂肪をとかし、其中にいれていりつけ、これに、水二三合と食鹽、胡椒、メリケン粉、砂糖少量を加へ、二三十分間かきまはしながら煮て、どろ〳〵になりたる時、炙りたるパンの上にかけて食するも可なり。
又、玉葱の上下をきり、二三十分間、水に浸し置き、出して、十四五分間程湯煮し、又湯をかへて湯で、やはらかになりたる時、皿に盛り、其上へ、バタをのせ出すべし。
又、ゆでやはらかくなりたる玉葱を、鍋にて、バタを、とかしたる中にいれ、胡椒食鹽を加へ、煮込て食するもよろし。

牡丹菜牛酪煮

牡丹菜の莖をきり、上の葉を去り、能く洗ひ、さつと湯で、細かくきり、水氣を去り、鍋にバタをとかし、食鹽胡椒をふり、前のゆでたる菜をいれ、かきまはし煮り、おろし際に、鷄卵をときたるものをかけて、上下とよくまぜて皿に盛るべし。（牡丹とは玉菜の事なり）

割烹と禮節（承前）

第二編割烹教授

（第一節近來の教師と教授法續）

赤堀峰吉老人

新聞雜誌紙上に於て、岡野知十氏が推擧を以て、都下料理茶店職人の古老たる由を知られ、且、女子師範、ならびに、成立學舍などの教師たりし事をも知られ、尚、磯邊武者五郎氏の賛助を以て、

治庖會に割烹協會に、其の人あるを世上に紹介せられたるが如し。されば、老人が所述は、太陽といふ雑誌、其の他の新聞紙にも散見する所なり。扨老人は、我が大日本食物會の割烹教場の創立以前の生徒にして、其の師範學校に在りし時、其の成立學舍に教師たりし時、其の治庖會の開會の時も、共に同教場主任の贊助教授を仰ぎたりしなり。然れば簡單に、其の稱を下して、割烹教場生徒中の一人たる由を紹介す。然るに、世間、往々、余が割烹教場と老人が治庖會の割烹教習を並べて、以て同種の物と誤認し、甚しきは、割烹教場は、世上の禮節儀式を教授をなす所、治庖會の教場は、實地に料理を教授する所と誤聞傳言する者有り。

割烹教場の生徒中の一人にして、普通の料理茶店向料理法を以て、世業となし、傍ら、其の料理法を

教授す。治庖會は、其の料理法を執行するの會名なり。かくの如き世業の會名を有せる老人が、教授法は、實に、なほ、其の世業と會名とに依て立てられたるなり。即ち普通の料理茶店風の食品を採合して、生徒に應用せしめんとするに有るが如し。賓客の饗應は勿論、臨時客の馳走に應用せらるゝ食品採合の教授法は、未だ教授しあたはざるなり。

赤堀峰吉氏 今峯翁といふ 其の先遠江國城東郡平田村を開し人、義時といへる人 ひとこの義時は公家の末裔 の臣なり。赤堀氏といふ、代々同村字峯田上七十六番地に住居し、世々農業をなせり。(中畧)政吉、天保十三壬寅年同地出火の際類焼せしに依て、江戸に出でゝ、日本橋大工町に居住して、料理茶店を開く、其の業漸く盛りになりぬ。政吉に二男一女あり、長を峯吉といひ(中畧)峯吉、即ち

家業をつぎて明治の初年に及べり。而して、其の後所々に轉住す。然れども、なほ、其の業をなせり。峰吉に一男二女あり（中畧）長男を熊右衛門といふ。今、其の業をつぎたり。今日本橋西河岸に住居す。

こは、去る年、老人が、其の家の木牌を寺院に納めんとて、其の家の事を語りて、余が拙文に誂へし時の反古の節略なり。

又料理には、種々の法あり。即ち四季惣菜料理普通料理、會席料理を始めとして、婚禮式用、祝儀式用等、其の他、種々あれども、先通俗一班に日用多く使用する所の四季惣菜料理の事を述ぶべし。云々

とは四季惣菜料理とて、大陽（雜誌）に掲載せるものの端詞あり。この言に依て、此の人の敎授法の如何なる點に存するかを明らむべし。

門下に亀井まき子氏あり。聞く所によれば、女學館の割烹敎師の任にありとか、老人が敎授法其の儘に敎授せらるゝが如し。氏が敎授法は次にいふべし。





學藝

國文學講義

井上頼文

紫式部日記講義（二）

おまへにも、ちかうさふらふ人々、はかなき物がたりするを、きこしめしつゝ、なやましうおはしますべかめるを、さりげなく、もてかくさせ給へり。

御ありさまなどの、いとさらなることなれど、うき世のなぐさめには、かゝる御まへをこそ、たづねまゐるべかりけれど、くつし心をばひきたがへ、たとしへなく、よろつわするゝにも、かつはあやしき。

釋義

○おまへにも　おまへは、御前にて、中宮の御事を申す。御前とは、當時、甚だ敬ひて云ふ時に用ゐられたる言なり。後に、御前を、ゴゼンと、音讀によびかへて、女の敬稱とせり。靜御前、巴御前などいふも、これより、くつれたるなり。さて、にもの、もは、きこしめしへ係れり。

○はかなき物がたり　タアイもなき、世間ばなし、などをいふ。

○べかめる　可く有るめるの約、めるは、見え有りの約辭にて、推量する意。

○さりげなく　然有氣なくにて、なやましき氣色も見せ給はぬなり。

○うつし心をばひきたがへ　うつし心とは、現在の心にて、たしかなる本心といふにおなじ。

即ち、宮仕なとすべき身にあらず、と、思ひ込みたる、その本心を引き違へての意なり。

○かつはあやしき　かつとは、一事のあるに、また、他の一事にもわたる言なり。即ち、一方には、佛道なとに歸依して、宮仕なとは、なすまじ、と、頑固に思込みたる者が、また、一方には、かく宮仕せんと思ふ心になりたるは、われながら、誠に不思議の事よ、と、の意にて、式部が述懷なり。あやしきの下に、事よと、いふ歎息のことばをふくめたり。

譯　解

中宮の御前にもはゞからず　近侍せる女房達の、とりとめもなき物語を申上ぐるを、御聞きとりあそばしつゝ居らせらるゝが、御妊身中ゆゑ、サゾメシ、ウットシクましまます事ならんに、すこしも、ウルササウナ、御風情も見せ給はず、御かくしあそばされたり。さても、御勘忍づよき御事よ。

中宮の御こゝろ廣く、御辛抱づよき、御ありさまなどを、今更のやうに、とりたてゝ、とやかくと、申上ぐるにもおよばぬことなれど、ヤッパり、御ほめ申さずには居られねば、かやうに、申上ぐるなり。

つらき憂世のなぐさめには、かやうなる、あどけなき、女房たちの、タアイモナイ、世間ばなしなどして、にぎやかに遊び暮して居る、御前を尋ねて、宮仕をなすべきものなれど、それは、世の中を遁れんとする、式部が本意にはあらず。しかるに、中宮の御前の、おもしろさに、その本心を引き違へ、かやうに、宮仕せんと思ふ心になりて、たとへんかたなく、憂き苦勞の多き身をも、忘られて、朝夕なとげなき女房なとに、

たちまじり居るも、また、實に不思議なる事よ。これと申すも、ひとへに、中宮の御ありさまの、よろづに勝れさせたまへるによりてなりけり。

漢文學講義

佐々木天遊

捕雀説

賴山陽

雀。小黠善畏。望レ食而不二敢下一。鴉。多智善就レ利避レ害。鴉之所レ在。雀則下レ之。故捕レ雀者。以レ鴉爲レ招。繋二鴉之足一。環二散粟一。而隱二網其傍一。鴉俯啄レ粟也。群雀望二視之一。嘖嘖然。蓋相告曰。彼在焉。我可二以往一也。連レ翼而下。百啄喧爭。而網已掩レ之矣。嗚呼。彼自謂下智且巧。莫中或敢侮上レ予。而爲レ食繋二其手足一。貪戀不レ能二自脫一。而視之者。不三以爲二可レ憫一。而以爲レ可二與歸一。胥溺於禍機。而兩不レ悟也。可レ不レ哀哉。

雀、小黠能畏る。食を望むで敢て下らず。鴉、多智善利に就て害を避く。鴉の在る所、雀則之に下る。故に雀を捕ふるもの、鴉を以て招となす。鴉の足を繋ぎ、粟を環散して、網を其の傍に隱す。鴉俯して粟を啄む。群雀之を望み視、嘖嘖然たり。蓋相告て曰、彼在り、我以て往べきなり。翼を連ねて下る。百啄喧爭、而て網已に之を掩ふ。嗚呼、彼自ら智且巧、或は敢て予を侮るなしと謂ふ。而して食の爲に、其の手足を繋れて、貪戀自ら脫する能はず。而て、之を視るもの、以て憫むべしとなさずして、而して、以て與に歸すべしとなし。禍機に胥溺れて、兩ながら悟らざるなり。哀まざるべけんや。

賴山陽先生の雀を捕ふるの説であります。説は文体中の一つでありまして、論と別に甚しき相違は御座りませむ。偖本文にかゝりまして、雀と申します鳥は、皆様方も御承知の通、小黠と（楊子方

言に、黠は慧也。趙魏之間謂二之黠一とあり、サトク智惠あるとで御座ります）小狡黠くして、利口な鳥で、よく恐れ注意をして、食物を望みながめても、敢てむさと下りおりて喰ふことを致しませぬ。小知惠がありて、注意深き鳥でありますから、食物がありましても、油斷が出來ぬと思うて、容易に飛降りて啄みませぬ。併亦、雀の小知惠がある所を應用して、却てダマシて之を捕ふる工夫が御坐ります。それはドウスルかと申しますと、鴉の烏で、（鴉は烏に同じ。カラスのことなり。分ちて申しますと、純黒にして反哺するもの、之を烏と謂ひ、小にして腹下白く反哺せざるもの、之を鴉と謂ふ。併し唯だ單に烏と心得て差支なし）烏と申します鳥は、亦中々智惠が多う御坐りまして、上手に自分の利ある所に就き集りまして、自分の危き様な場所には、避よけて飛下る様なことを致しません。餌が落て居りましても、自分が人にでも捕へらるゝと謂ふ様な危害な所には、決して寄附ませぬ。之も亦中々用心深かき鳥であります。雀はチャント之を知りて居ります。ソコデ烏の飛下りて居ります所なれば、アノ用心深き烏が、飛下りて居る所だから、決して危害な氣遣はなしと、雀が思ひまして、自分も烏の居る所に飛下りて、餌をあさります。（ワウシマスト、大層雀が利口の様でありますが、却て、其の小智惠が、だまされて、禍を招くの媒になりますので、憐むべきものであります）故に、ソコデ、雀を捕へますものは、烏を以て囮となしまして、雀を油斷さして、招寄するの道具に使ひます。（招は、足を搦くことで、足を繋ぎとめて、鳥を呼ぶのをとりにすることなり）ので、烏の足を糸で繋ぎ、（繋は繫也。絆なり。つなぐことなり）止めて置きまして、雀

が望視ましても、一向繫止てあることが、分りませぬ樣に、其の近邊には、粟を撒散かして、(環散は、めぐらしちらすことにて、なたりこたりに、撒散すことなり）さうして、網を其の傍の横の方に隱して、雀が氣附かぬ樣に致して、雀の下りてくるを待ちてをります。鴉は、足を繫れ居るものでありますから、飛上りも何もしませんで、首を低れ俯して、其の邊にちらばりてをります所の粟を、啄み喰うて居りますのぢや。所が雀は、烏は足を繫れて居ることを知ずして、唯烏は危害ことがないと見定めて、飛下りて、餌をあさりて居ると思うて居るものでありますから、自分達も、下りて粟を啄はむと思ひまして、群る雀が、之をながめみまして、喧騷く鳴てをります。(嘖嗜は、鳥の鳴く聲であります。嘖々嗜々、共に同義で、鳥のなく形容詞であります）蓋（蓋に起語辭と、接語辭との區別がありますが、玆所の蓋は、接語辭にして、少しく推原の意を含むで居ります。蓋し雀の、嘖嗜と鳴て居る心持を察すればと謂ふ樣な意なり）雀の嘖嗜と鳴てをる意を察してみるに、彼等互に相告て、話をして申しますのには、彼の烏（彼は鴉を指す）が、彼處に在りて、餌を拾うてをる。彼の害を避けて利に就く、用心深き烏、が下りて居るからには、大丈夫だ、決して危害きことはない。自分達も飛び往て、粟を啄むべきぢや。危害ことはないのぢやと、互にやかましく告語りてをります。(山陽先生が、雀の鳴て居る心持を推測して、個樣に申されたのであります）そこで、鴉が居るから安心と謂ふもので、澤山の雀が、翼の羽を連ね並べて、群をなして飛下りまして、百啄と、澤山の啄で、粟を啄み、喧しく、やかましく鳴き爭うて、粟を食てをります。さうし

て、雀が油斷して、安心と思うて、爭うて粟を啄みて居ります間に、兼て隱しております所の網の網を、烏渡と思ふ時分に、隱れて居ます所の人が、引きますものだから、雀は殘らず、網の中に引覆られまして、殘らず捕へられますので、網が已にはや、之を（雀を）掩ひかぶせて、逃ることが出來ぬ樣になりて、悉く捕へられて、彼が居るから、安心ぢやと思うてしたことが、却て生命を失ふ樣な、墓無ことになりました。（矣は、截然緊殺之辭と申しまして、一定不移の意を帶たる歇語辭であります）嗚呼（嗚呼は嘆語なり。是より、以下、初めて本題の精神に入る）誠になさけなきことで、彼れ自ら（彼は鴉を指す）彼の鴉自身には、自身を、智惠がありて、且又巧者であるから、人がありて、むさと自分を侮り、輕蔑するものがないと、個樣に思ひて、自慢して居ります。されど

も、なさけなきことには、食物の爲に、其の自分の手や足を繫れて、自由自在に、飛廻ることも出來ず。窮屈な思をして、唯食物が欲しき計りに、貪り慾うて、食たいと、自由自在の翼を持ながら、窮屈に、手足を繫れ、囮に遣れて、自ら自分の身を脫して、自在の身體となることが出來ぬ。誠になさけなき話で、憐むべきものである。さうして、之の繫れて居る鴉を見る所の雀も、かわいさうに、鴉は食物が欲き計りに、手足を繫れて居るが、憐む（憫は憐也。哀也）べくして、なさけなきことであるとは爲ずして、さうは思ぬで、さうして、却て以て、彼の鴉が居るから大丈夫だと、鴉と共に、一所に歸し（歸は歸往なり。ゆくことなり）往きて、鴉の居る所に雀も飛下り往きまして、禍機に相溺で、相率ゐて、禍機の不仕合なめに溺れ落ちはまりまして、網の中に引覆せられて、人の爲

に捕へられてしまひます。(發動の由る所を機と謂ふ。禍機は、災難のしかけと謂ふ樣な意味なり)さうして、鴉も雀も、兩方ながら、悟らずして、とう〱、目を覺すことが出來ぬで、鴉は矢張食物の爲に、手足を繋れて、自ら脫することが出來ず、雀は鴉を憐むべきものと思ぬで、却て共に往べしとなして、網の中に掩はれ捕へられて、兩方ともに、悟りて、迷の夢を覺すことが出來ぬぢやが、可レ不レ哀哉で、なんと哀いことではないか。誠になさけないことで、哀むべきことである。(可レ不レ哀哉は、哀まぬでをられやうや、哀まぬでは居られぬと謂ふ程の意なり。哉は、歇語之辭也。畧乎の字に似り、然も乎の字は、多く疑の意を帶ぶ。哉の字は、却て嗟嘆の意を帶ぶ。是れ其の別なり。)偖、此は、鳥の話でありますが、人間でも亦同じなとで、本來自在の身を持ちてをりながら、富貴とか、榮華とかに、手足を絆れて、自ら脫出して、志に適することを不レ能ものもあり、亦人の富貴榮華をみて羨み、自分も、亦富貴榮華を求めて、手足を絆がれに往くものもありまして、穴堅に、鳥のこと計りを愚になさけなしと譏るわけにはゆきませぬ。自分も、亦鴉や雀をみて、自分の戒となさねばなりませぬ。嗚呼より以下、作者の精神寓意のある所でありますから、篤と玩味して、潜心せられんことを希ひます。



漫録

女訓綾廼雛形　巻の二

揖取素彦

家に在つての心得

一　朝はもの丶色目も見分くるほどにならば、起出て、静に音のせぬ樣に、夜のものかた付け、嗽手水して、かりに髪かきあけ、まづ父母の機嫌をうかゞふべし。まだ起出で、（但冬の夜長き頃は、六時を聞たらば、未だ明けすとも、起出つべし。）給はぬ程ならば、屛風障子の外より、はや、御目さめ給ひしや、今日の朝ばらけは、殊にうるはしく候など丶、一と言音なひて、さて近くまゐるべし。から樣の時うちしはふきて、おとなふは無禮なり。父母、また、目上の方々へは、斟酌すべし。都て人の臥所へ參るには、必ず外よりおとなひて入るべし。此の心づかひは、閨ばかりにもあらず、一間に人ありてもの語らふ聲聞えぬ時は、いつにても一言おとづれて後に入るべし。むさと、襖障子ひき明て入るべからず。父母まだ覺め給はずば、靜にまかんでゝ、又さめたる時まゐるべし。烟草など嗜む人ならば、火取を用意して參るがよきなり。さめ給はゞ、枕邊に手をつかへて、安否うかゞひ、起き出給はゞ、夜のものなど片よせ、手水の湯など汲むことと父母の仰をまたずして、とくはからふべし。やがて、鑵子の湯もたきる頃を見て、朝茶煎じ、父母に參らすべし。此の間に神前を拜し、父母安泰にして、家内無事に榮ゆ

る神恵を賽し、かつ將來の神佑を祈念すべし。

又、祖先の靈に告す事、神拜の時の如くすべし。女子は、神拜にも拍手の法を用ゐぬ方がよし。

神の御事は、人のとかう云ふに習ふべからず。吾國の基を立、國を開き給ひし大御功績さへましますに、上は現神と稱まつる、一天の大君より、下は吾々に至るまで、皆神々の裔にあらざるはなし。況て、今も猶夜となく晝となく、守幸給ふに於てをや。たゞ敬ひ畏りてのみあるべし。日毎の拜も、化粧身拵らへとゝのひて後すべきなれども、中より下の人は、朝のしたため何くれの暇あるまじければ、起し後手水さへ濟まば、拜してもくるしからず。神靈を拜し、物を供するに、現の人に參らするより一入心を用ゐ粗略なき樣にすべし。うつゝの人は、眼前にその良否を言ひ、怠りあらば叱りも、せられん。神靈はさる事もましまさねば。最も敬愼を盡くすべし。

一父母に膳を進め給仕しながら、伴食すとも、亦濟みて食するとも親の仰に從がひ、時宜次弟にすべし。家に伯父、姑、兄弟姉妹の在るあらば目うへの人々には、父母につゝいて膳につかしむべし。兄姉なとは、起ちて、手傳はるべけれど、成るたけ長者を勞せざる樣に心かくべし。學校なとへ行事あらば、晝餉の破り子をはとく申つけて、下婢に用意をさすべし。婢なくば、自ら調じて、間の欠ぬ樣にすべし。さて髮かきつくろひ、けしきはかりも紅粉をよそほひ、衣着かへなとし學校へ參るならば、手文庫割子の類、とり落さぬ樣に心付べし。衣の着かへするには、必ず人の出入するかたにむかひ、帶とくべからす。たとひ常にしめ切てあるも、戸障子明

けたてすべき物にむかひては、必ずすべからず。成丈、納戸などの物陰にて着かへすべし。若納戸やうの所なくば、おくまりたる壁の隅を小だてにして脱ぎ、着かへすべし。學校へまゐるにも、また餘所へ行くにも、兩親の前へまゐり、そのよしを申し、自然ひまの入る事あらば、某某の時刻には歸り參らんと申し、さて家内の人人にも、其のほど／＼に會釋し、婢僕へも夫々に詞をかけて立出づべし。家に歸らば、父母に目通りし、其の由人々へ會釋する事、出る時に同じかるべし。もし出先にて、引留られ、時刻うつるべく思はゞ、父母の契りし時も過ぎ候はんと申て、暇を乞ふべし。いかなる尊貴の方々に對しても、父母の爲にする事は、少しも斟酌申さず、御ゆるしをうくるかよろしきなり。まして並々の人にむかひては、聊子細なき事なり。

こゝに倚門の情とて、さる事あり。唐土戰國の世に、齊の國に王孫賈といふ人あり。その母は勝れたる賢女なるが折しも齊國は、燕の軍にうち敗られ、都を落されしかば、齊王は、莒といふ地へ開かれて楚國へ援兵を請はれしに楚の大將、淖齒といふ者、異心をいだき、援兵かへつて仇となり。王を殺し、齊地を却奪し畢ぬ。時に賈は、王に從ひて走りしが、入亂たる軍のまぎれに、君臣わかれ／＼となり。行方知れねど、力なく家路をさして歸りしに、母は賈を責めて言ふ樣、汝、朝とく家を出て、晩るゝまで歸らねば、門の戸に立そひて、今や／＼と待くらしぬ。また、夕さり立出て、終夜かへり來ぬ時ある時は、里の出口に佇みて、夜を立明す事もあり、かくばかりいと惜しみたもふ汝なれど、君臣の大義をいかにせん。王の御先途をも見と

どけ申さで、我を訪はん爲に、態〳〵と歸り來りしは、何事ぞと、以の外の氣色にて有しかば、賈は、これに膽つきて、終に淖齒を討亡し、王子法章を求め出して、王位を定め、田齊中興の基業を建しも、畢竟賈母の庭訓による處なり。かゝる稀世の賢婦すら子をおもふ心の闇のやるせなきに、夜を立明せし事のあるぞかし。これを思はゞ、假初のあるきにもとく歸りて、老たる人の待わび給はぬ樣心がくべきにこそ。

一午晩の食事にも、膳を參らする事朝餉と同じ心得あるべし。夕餉も濟み、日も暮なば、神棚に御燈を供し、扨て、暇には、學びたる業を復習し。あるは、親の前に侍坐して、四方八方の語して、慰め申ばや。枕に就き給はゞ、夜のものしきのべ、夏は團扇などまで取り具して、涼しからんやうに心を用ゐ、寒夜には、衣ふすまをあたゝめ休ませ申す、枕邊につい居て、機嫌をうかゞひ、家内の人々にも式代申し、奴婢にまでも、詞を懸け、さて我が臥所に入るべし。

斧のえ（六）

松竹莊主人寄贈
荒木田麗女遺稿

おきな、君は御さいめでたうおはすれば、ふるきためしを思しいでゝ、こゝらの年月を經たることにやとあやぶませ給ふらめど、ゆめさること侍らんやは。都の一日もこゝろの一日もおなじことなり、いづちもひとつあめつちのうちにて、いさゝかたがひたることは侍らず。秦のみだれをのがれ入りたる世界にもあらず、まして葦田鶴にのりてかよふ宿にも侍らねば、うしろめたくな思しそ。

世のうきめ見えぬ山路とても、都にかよふみちは侍らずやは。御心やすくして遊をもせさせ給へ。うちつけにさし過たるやうなることは、よにまことゝもしんじさせ給ふまじき物から、夜べより忍びこめ侍れど、かく見奉る契もあさからず、おろかに思ひ奉るべきならず。おいぬる身は、ながゝらぬ事とて、あやまちありても、をしむべうは侍らねど、ゆくさき遠き御身は、すこしのつゝかもおはしまさんは、いと心くるしき御ことに思ふたまへて、なん。しひてとゞめ奉るも、かならずゆゑありとおぼせ。つひには御身のさいはひにこそ侍らめ。思しあはすよも侍らんと、まめたちたるに、君おい人のとはす語は、よのつねのことにて、それくつし出んとて、こと〲しげにいひなすなめりと、むづかしけれど、むかしよりふる人のことば、いみじきものなりけりと思すかたもあれば、いとうれしき御言のはの末なんゆかしきを、なべてならぬちぎりのほどを思しゝらば、ことのこいたまはざらんこそ、かひあらめ。さらば、庭の教にもまさり侍らん。身を捨ても、壁に殘しける御法は、つとめまほしうと、せちにの給ふ。おきないでやさもめでたきたぐひに思されんは、なかなかはづかしう、ゆめまことゝもおぼされじ物をとて、おのれ若かりし時ものまなぶとて、大和使につきて、もろこしにわたり侍りにし年頃になりしかど、おろかにて、ふみのかたは、傳へ得ることも侍らず。わづかに易の占、あるは相など心にいれて侍りし。此の國にかへりし後も、時々こゝろみ侍りき。京にも、おのが相せし人多く侍りし。おほかたは、たがはぬやうになん聞侍りし。きのふ山にて君をはじめて、見奉るまゝにうちおどろかれ侍りにし。うちづけめにて、ひがこと

もぞと思へば、猶たしかにこゝろみまゐらせてんとて、かくいざなひ奉れるなり。さてのとかに夜へよりつく〴〵と見奉れど、さらにたがはせ給はねば、いみじうあたらしくて、えしのび侍らぬぞとよ。君の御相は、すめらぎの御末にて、いとやんごとなく御さい世のおぼえうちあひめでたしなどいふもさらなり。御子もかず〳〵にありて、いやましにさかえたまひ、門ひろげ給んずるなり。御さえも、此の國にはあまるばかりなれど、過たりといふべくもあらねば、それさはりとなるべくもなし。すべて〳〵あかぬことなく、世にありがたくおはしますに、いかなることにかいさゝかなるをかしにより、十日のうちにいみじきわざはひいでまうてくべく、ようせずば、都をはなれ給ひぬべく、此のことのがれ給はんすぢは、つゆ見え侍らず。さはいへど、こと無からんさきに、所をかへて、その日數過したまはゞ、いとようまぬかれさせ給はんずる。これそのはじめより、うけ得て、御身にそひたるわざはひには侍らず。かりそめに心もてしいで給ふことなれば、とりすてんにいと心やすし。さりとて、都のうちに、さながらおはしませば、えまぬかれさせ給ふまじきが、わぢきなくてなん。そのことゝなくとゞめまゐらするなり。御むかへの人々、今におとなきも、かくてこのつみのがれ給ふべきしるしと、見給ふるがたのもしく、わざと御おくりにとも聞えさせ侍らぬことゝいふに、君、いとにつかすとおどろかれ給ふ。相人といふこと、からやまと例しおほかなれば、今さらにそれさもあらじとなほざりにいひやぶるべくもあらず。ことに日數もかぎりあれば、よしや相によらずとも、しばしこゝにあらんにあるじのなさけふかければ、さのみものうくも

あらじ。故郷のうしろめたさは、たへかたけれど、身にうきことあらんよりはとおもひなされて、いといとかしこき御をしへに、なか〳〵夢のこゝちして侍り。いみじき御とくにこそ侍らめ。とてもかくてもをはりはてぬいのちなめるを、やすらかにて、こそ京にもすまゝほしけれ。うきことあらんには、このまゝに山こもりこそましならめと、涙くみ給へるが、限りなう心くるしければ、おきなもほろ〳〵となきて、さのみ御心よわき御こととかは。な思しいれそ。いまだに、今かはらずめでたくて君にもつかふまつらせ給ひぬべしと、いひなぐさむるほどに、夜べのおきなもまゐりつれば、おほみきなどまうけて、むかし今の物語きこえなどし給ふ。中將酒も、都のにはかはりて、めづらしうおぼえ侍るは、三輪河の流をくみいで給へるにや。又、所からは、菊の下水にやとて、あるじにさし給ふ。

「時しらぬ菊の下水くみそめて今日よりわれも千代をむすばん」、あるじいといたうめでまゐらせて

「君に今日ちとせを契るしら菊はさける山路のかひとこそ見れ」春を經て熟し侍る竹の葉になどひげ申しひそりのれきな、

ゆづるべき千とせをかねてしら菊は花の秋より君をこそまて」とて今日は、碁はうたで、物のねかきあはせてあそびくらす。あるじは琴をすぐれてひき、一人のおきなの横笛をいみじき音にふきすましたり。中將あそびのかたもたへたまひ、とりわけ、和琴を、心にいれたまへば、いとめでたうひき給ふ。

（未完）

茶話指月集（三）

鵺巣子筆錄
寄稿人孤峰庵祿仙齋不美

關　葦　雄

利休居士いまた千の與四郎といひし時、堺にてはじめて茶湯を出し、先づ、古老あれば北向道陳をよぶ。その後道陣が知音を賴み、異見を乞ふ。道陣與四郎が茶湯を褒て、やがて及ぶ者有べからず。一つはゞ大茶入より、茶をたぶ〳〵とすくひて點るを、茶をすくなく入れてかすりだてにたてたらば、一きはよく有べしといへるを、與四郎聞て、やがて得心したるとあり。

註譯不美曰、千與四郎は、利休、若壯の頃の通稱なり。堺は言迄もなく、泉州堺なり。始めて、茶の湯を出しゝは、則、茶の客をせられたり。其の頃、同堺、舳の松町に、北向と云ふ所に道陣とて、茶の巧者あり。第一着に此の人を招聘して、一會を催したり、雖レ然直接に茶の湯全体の事を不レ聞、道陳が知己の人を賴み、此の程利休が茶は、如何にかと懇切に尋ね、御異見もあらば、御十分に御討議被レ降たしと申述しかば、道陣の云はく、いやとよ。與四郎が茶の湯、中〳〵に能出來たり。出凡の才あり。頓て、名人上手に可レ成と、大に感心せられ、贊成の旨寛々談話せられたり。然レ雖慾には、大茶入より、茶をたぶ〳〵とすくひ點るを反對して、茶をすくなく入て、かすり點に點たらば一入よく有べしと示諭せられ、さらば利休居士は知己より、其の事を聞て、大に感を催ほし、道陣の垂誨を拜謝し、爲二茶道一悟り得て、益茶の道に稗益を與へ、數奇の參考に備へんと思

ひたり。偖は、此の事を考再考するに、餘程了解に困難の場合なり。此の一章には、老予畢世の力を盡し、几上に俯仰する事幾時間費したれども、考案に不ニ有附一會壯年の際故宗壽教授の百端を併せ考ふれば、此の一言は、意味深重にして、本誌限り有二三頁には解盡し難し。今般は、其の一句を示さんに、大茶入より茶をたぶ〳〵と入て點つるは、所謂普通一般當然の事にて、一會の興味薄力なり。大茶入より、すくなく入てかすりだてにせよとは流石道陣とも言はるゝ人の確言敬伏の外なし。すこし、入て茶を惜むにあらず、此の邊が茶の服の加減にて、茶の分量、其の宜敷を得て是に汲入るゝ湯も、能く適當し、茶筌の振り方も、不レ多、又、不レ少して、點たらば其の眞味一段美事に、客も始めて、其の舌頭を裁斷して、茶之眞味を喫し、諂ひに非ず。虚世辭でなしに、純粹明白に御服加減結搆と言語を主人に對し云ふに至る場合を來すべし。然らば、主客滿足愉快、此の上なからん。左すれば、一會の本分は成し得たりと云べし。御令閨貴婦人方も、何卒、此の意味丈を御採納の上、御茶も篤と御心掛を願ひ升。

曲亭馬琴が眼中に映ずる女性を論ず（其の十四）

白松園主人

赤根半六は、領主の許可を得て、既に楠を凋落せしめて、今は容易に伐る事を得べくなしぬ。渠は身を立て、家を興すべき端緒を開きたるに似たり。馬琴先づ、之を評して曰く、

されば半六此の木を伐りて、一旦身を立つるに似たれども終に南柯の夢さめて、その子半七憂苦に迫り、父よ母よと鳴く蟄虫の、蟄屋が軒の木がらしに、花も紅葉も難波なる身のよしあしを諭はるゝ、これそのことの起りなり。

斯くて、半六は我が物得つと思へば、雀躍に堪へず、先づ領主の見分あるに先ちて、一二の枝をおろさゞれば、充分我が奇特を示すに足らじと思ひ、やがて彼の楠に攀ぢ上り、街道のかたへさし出でたる枝に索を着けて、斧をもて丁々と、斫りたりしが、如何にしけむ斧の柄ぬけて、折から通りかゝりし旅人の頭をうち割りぬ。

伊賀路より、大和を經て、山城へ出づるにやあらむ、背に斑の袱も、小斑木綿のやゝ破れし、檜の笠に竹の杖、木立いぶせき山路を、たどる〳〵來る盲人ありけり。親子と見ゑて只二人、年まだ七ツ八ツばかりなる小女兒に、手を引かれ谷より木垂れし楠の下を、過らんとする處に、半六が斫り落しゝ斧、彼の盲人が笠の上に閃めきかゝり、頂をさつくと

斫折れ、あっと一聲叫びもあへず、俛伏に仆れしかば、女兒は周章ついゝ爺さまなうと呼び活くる、涙に聲も立ちつ居つ、せんすべもなく見ゐたりけり

此の時端なくも、半六が妻輪篠は、其の子半七と共に夫のこと、心元なくて、晝餉を運ぶにことよせ、三里の山路に尋ね來りけるが、此の有樣を見て仰天し、急に半六を梢より呼びおろして、諸共に介抱せしかば、漸く息をば吹きかへしぬ。されど痛手なれば助からんやうもなく、盲人は生國姓名を名告、涙ながらに女兒おさんを半六に托しぬ、且つ渠はおさんが三つの時、生き分れせし妻の、再會の紀念として、三味の撥片割をもたりしを半六に告げて、おさんが再會のよすがとせんことを求めぬ。之を聞ける半六はもとより、輪篠は盲人に謝するに、女兒おさんを成長せて、我が子半七に娶はせんことを盟ひ、且つれさんの母にも環り

あはするやうにせんことを盟ひぬ。是に於て盲人は息絶えぬ。其の間の文を抄出すれば左の如し。

……盲人苦しき息の下に、潸々と落涙し、知らぬ大和路にたどり来て、仇にもあらず恨みもなき、人の手斧に命を隕すもみな前世の悪業ならめ、わが身は原鎌倉の管領、扇谷殿に仕へて、丹波太郎孝基といひし者なるが、故あつて退糧し世わたる械のなきまゝに、夫婦窃に談合して、ふりにし跡をつぎふれの、大和物語にあらねども難波の浦の蘆刈が、あしかる縁しとおもひたね、女兒おさんが三才のとき、飽ぬわかれに妻を去り、富貴の家に給事、又發跡日もあらば、ふたゝび環會んとて、華洛へ上せし次の年、我身はからず眼病を患ひ、遂に瞽者となりしかば、…………

三味線は此の當時に未だ我が國になし。然るに此の盲法師の持ちたりといふ事を馬琴は、左の如く護魔化せり。

………又脊負ひし秋包は、異國傳來の樂器にて、その形阮に似たれど、阮ならず。三條の線をかけて弾くに、千萬無量の音を發す、鄭聲なれど味あれば、只私に三味線と名づけ年來秘蔵すといへども、世に稀なれば人も知らず、されば夫婦が別れし時、この三味線の撥を折き、再會の紀念とせしその片割はこゝにあり。………望みがましき事ながら、此の三味線は我が骸と、共に埋めて賜ひ給へ、もし後の世に此の樂器の、行はるゝ日もあらば、朽ちぬ名のみを呼ばれなん…

其の死に臨みて、女兒おさんを思へる言、悽惋としていと悲し。

………さてもかくても此の痍にて、存命べくも思はれねど、恩愛のやるかたなさ、泣かじとすれど空蝉の、息のうちより惑ひぬるは、只この女兒があればなり。八才といへど年弱にて、十一月七日の出生、圓波太郎孝基が女兒おさん、と父が手づから書きつけたる臍帶は、今もなほ女兒が項に掛けさせて、護身嚢の中にあり。………親のなき子と憐まれ、人の情に生育は、懇しゆかしとおもひ子のおさんが母に名のりあふ、……

斬りがたかりし米谷の楠も、故なく半六のためにきるを得て、茶亭の料となしつべき、大きなる板

を得てしかば、領主順昭のよろこび大方ならず之を推擧せし典膳も、いと面目ある心地して、頻りに半六の功を賛じて止まず。されど半六へりくだりて、いさゝかも其の功に誇らず、只此の寸功をおぼしめさば、その初めに願ひし如くいさゝかある者にても、家臣の列に加へたまひて、昔の武士となし給はるやうにと、只管乞ひてやまざりければ、典膳は之を順昭に吹擧していふやう、

彼が先祖を尋ぬるに、楠正勝の老黨なりしとぞ。子孫凋落て五世に及ぶと雖ども、今に武士の志を襲はず、弓馬の奥義もをさ〳〵家に傳へ、もとの武士にならまくほしうはあれど、家貧しくてさるよすがもなし、たとひ家に巨萬の財を積むとも、金銀は失ひ易し、此度の恩賞には、一握の米にもあれ、領主の祿を賜りて、家臣の數にも入る事あらば、本望なるべしといへり。げにその面魂、物の用に立ちかれまじう見え候に、あはれ莫大の御恤みをもて、戟を執り、鑣を銜し給はゞや、…………

嗚呼、その言勉めたりといふべし。手斧を使ひ薪を割ることより別に、太刀拔くすべも知らざりし半六は、只阿諛を呈して、遂に五十貫の新地を賜はりて、五條の村長を命ぜられぬ。下官なれども其の郷にしては勢あり。一郷の成敗を管りて、日毎に奈良へ出仕する身とはなりぬ。あゝ榮枯常なく、盛衰時なし。それ渇する者水を求むるに水を得て飽く時は更に湯を求め、湯を得て飽く時は酒をおもふ。是人慾の愼みがたき所なれば、半六既に望み足りて、領主の家臣となると雖ども、その職役の卑きを厭ひ、いかにもして近臣の列に入り、あは時を得て政事、與る事もや、と志して止まざりけり。

………暇ある日は、親しく典膳が家に交加、彼の人の爲めに志を運びて、冬は障子の隙を張りかへて、寒夜に爐の火を吹き、夏は屋裏なる蜘網をかき拂ひて、炎天に井を渫し、奴

俠の如く奔走して、その籠に擱たりければ、典膳ふかく歎びて、二なき人にぞ思ひける。

あはれ、半六が所爲實に傍痛しといふべし。吾人は思ふ。今日の官吏たる者豈に半六の行爲に劣る事を得べきか。否々俗吏社會の人のみならず、人の品性を陶冶すべき人にして、猶長官に向ひては、更に之より甚しく見苦しきさまをして、少しも耻ぢざる者を見る。然るにかゝる廉耻の欠け行くをも指さして、之時世に伴へる、德性の進步と云ふ者あるに至る。此の如き時は世降るに從ひて、燕石も黃金の上に出る事あるべく、泥棒も君子と云はるゝを得べく、詐欺師も敎鞭を揮ふに至らんか。吾人今此の半六がするわざをよみて、唾罵の言は移して、今の悖德漢に擬せざるを得ず。讀者は讀み行きて、半六がいかに耻づべき所行をして、顧みざるかを味ふべし。之蓋し作者微意の存する所あるべし。

老臣、蟻松典膳が妻の名を、敷波と呼び、長子曾太郎、其の次は女兒にて、園花といふ。當時曾太郎は九才にて、園花は四才なりき。半六かく典膳がり屢々出入につけて、その悴半七が臈闌て、心のいと怜悧ありときゝて、折々そが安否を問ふこともありけるに、半六は便りを得たりと歎びて、その佞ひいふ言甚だ賤しむべし。

……知らせ給ふ如く、某原艱苦の中に養育たれば、子を敎ふる事も心に任せず、今の身になりては、子どもよき事を見ならはし、君の御爲・自のために文學武藝もその心がけなくてはと思ひながら、師を擇むこさのたやすからねば、なほおのがまゝに生育ば、ゆく末さてもおぼつかなし、男の童は走りまはりも健輕にて召使ひ給ふには、老いたるかたに勝る事もあるべし、折ふしは半七を呼ばし給ひて、茶のかよひなど仕まつらせ給ひなば、彼が爲めには大なる僥倖なり……

さて、その次の日半七をゐて、典膳の家に到りし

に、典膳の子曾太郎は、よき友得たりとよろこび、典膳夫婦も、亦憎からずもてなして、これより常にわが子の如く慈みぬ。之れを見て半六はいよいようちよろこびぬ。

然るに、かねても云へる如く、半六の妻輪篠は、その志夫の鄙劣なるに似ず、いと正しき性なりければ、半六も屢々奈良へ行いて、典膳が家に止宿するを傍痛き事に思ひ、ある日夫を規諫していふやう、

……わが身幼かりしとき、父がわかき人に物數へたまひしを、聞き侍りたるに、君に仕ふる者は、公事にあらざれば、執柄の門に到らずさなん、しかるに蟻松ぬしは、一の老臣にておはするを、日來親しく行きかひ給ふすら、心ある者はなめげなりさて、爪彈し、僻める人は猜しさぞおもふめる、何事も新參にておはすれば、木にも附かず、草にも附かず、只まめやかにその職分を守りてこそ任すべきに、年齒ゆかざる半七さへ、彼處へ立ち入らせ給ふはいかにぞや、稚き者は心づきなくて、人の怒を惹き出すこともあり。

そのいふ所、皆肯綮に當り、しかも夫を諫むる言甚だまめやかに、妻女の職責至れりといふべし。

之によりてさすが半六も、妻に對しておもなく、その後は半七を奈良へ將て行かずなりぬ。典膳夫婦はかゝる事を知らざれば、迎ひの人を遣しなどすれども、輪篠は事に托してやらず。只讀書手習に心を入れて敎育し、又れさんをば、表面に輪篠の姪なりと稱し、之にも半七と共に手習させ、我が子人の子のけぢめなく、めでいつくしみぬ。嗚呼輪篠の如きは、世に得がたき賢婦人なるかな。知らず、盲人に盟ひて養育せるおさんが、性格はそもいかにぞや、愍べき此の少女、更に憐むべき者あり。乞ふ次號をよみて、此の女性の得失を判せよ。

（以下次號）

おもひのまゝの記

安藤晴晨

(三)ルイゼ皇后の機智

普魯西王フリードリッヒ、ウヰルヘルム三世は、其の、多くの將帥の中にて、特に、勇敢なる、フォン、ケッケリッツ將軍を、愛し賜ひ、既に、簡びて、東宮附武官となし賜ひき。將軍は、王と共に、幾多の事故に遭ひ、共に、之を凌ぎ來りし事なれど、將軍が王に對し奉りての、忠厚の情は、また、王が將軍に對しての、親愛の情と共に甚あつかりけり。

されど、王は、將軍と食を共にし、互に、相談笑し給ふ事、屢々にて、王も、皇后も、之を悦び給ひき。然れども、將軍は、食事の終はるや否や、いちはやく、帽と劍とをとりて、退出するを、常としけれど、兩陛下とも、之をば、あかぬ事におぼされたり。

ある日、皇后は、王に問ひ賜ふやう「如何なれば、彼の將軍は、今少し久しくとゞまらぬにか」と、王は、答へ給はく、「彼の老實なる者をして、心のまゝならしめよ。彼は、その家にて安樂に息まむ事を、のぞむなるべし。我等は、そを妨げざるべし」と、されど、皇后は、斯くのみにては、滿足せられず、何か、特別の理由あるならむと、賢しくも、思ひめぐらされたりき。

其の後の事なりしが、パレッツの別宮にて、また、將軍に、午餐を賜ふ事ありしに、此の時も、將軍は、食事終はると共に、いちはやく、退出せむとしたり。此の時、皇后は、烟草の美しく塡められたる、一のパイプと、小蠟燭と、マッチとを、御手づから、持たせられ、將軍の前に、進みいで、、

宣ふやう、「ケッケリッツぬしよ、今日は、わが前より、逃れ給ふには及ばじ。こゝにそなたの、パイプあれば、その爲に、家におもむく要もあらざるなり」と。

將軍は、そのパイプを、拜受して、之を喫し、そこに止りき。王は、此の機智ある皇后を、顧みて、宣ふやう、「いしくも計らひたるかな。我がルイゼよ」と。

(四)時世の推移と禮節

すべて、世の禮節は、時世と共に、その推移を免れず。徒に、古の禮とせし所に、かゝづらひて、今の世のならはしに、そむくやうならむには、頑なりとの、誚をまぬかれ難かるべし。彼の松平定信公、(樂翁公)が、新婚の後、夫人、峰子の懇請に應じて、婦女子の、訓戒とあるべき事を、鈔錄して、おくられし書、難波江の中にも、亦、左の如く、述べられたり。

一、男女、相授くるに、手を以て授けず、下におきて授く。若、下におく事不能者は、受るに篚を以てすと。是、古の禮にて候。當時は、男女の間、かろ〲しく、うちまじり候ふを、へだてなき歡樂とおもひ候。如斯ときに、手を以授けじとし、門を出れば、其の面を掩はむなどすれば、則、ならはしにそむくべく候。古の世は然なり、今の世はかくの如しと、時の勢を、審らかにして、その宜しきに、隨ふこそいみしく覺え候。

(五)峨山老師の言

此の頃、歿せられたる、天龍寺の峨山老師の詞には、頗、味ふべきが多し。次に、かゝぐるも、その一なり。

何をやるにも、せか〲して、早く功果を貪る

まいぞ。弓を射るに、的へあてる事をのみ、樂としては、十本が九本まで、好し的中しても、たゞ、それがあたれるのだ、先、体をきめて、充分に、弓を引しぼると、的が、矢のさきへ、粘着するかの、感がおこる、此の境界にならむには、何をやつても駄目よ云々。

實に、趣味深き詞ならずや。流石に、禪の極意に達したる人の言かな。反覆すれば、する程、益、趣味津々たるを覺ゆ。

歌の調（下）

清瀬元太郎

調とは、如何なるものかは、既に述べたる所にて、略ば明瞭ならんと存候、たゞ如何にして調をとのへんか、今一度、桂園翁が門生に對する教訓を引き、事實を以て、説明に代らしむる方遙に宜敷と存候。

　艫つる船は濱邊にたゆたひて
　波にいでたる月のさやけさ

波に出でたるの詞のびやかならずして、手つゞなり。依りて、其の景色浮び侍らず。たゞ調べ方にて、歌となり、歌とならざるなり。此の波に出でたるといふ語調は、島臺樣の物の造り物に波の上に、月を拵へて出したる樣なり。此の死活の違ひ御聞きわけあるべし。

　あまりにも烈しかりける夜嵐に
　宿はかれども寢られざりけり

かりけるは延びすぎ夜嵐はつゞまりたり。依りて景色うかばず。

　冬の夜はわれさへかくも寢覺めけり
　老いにし人はいかになけかん

之は老人を思ふ調にあらず、荒涼なり。譬へば『五月雨はわれさへかくもわびしきに苗とる賤はいかにあるらん』などの語調にて、上より下を見下していふ調なり。誠に、老人を思ふとならば『老人はいかにあるらん冬の夜は我れさへかくもわびしきものを』など詠むべし。これ下より上を思ふ調なり。味ふべし。

なきわたるみ空の雁は秋霧の
深き今宵やわびしかるらん

み空の雁は、秋霧のといふ二三の句の續き、凡てに合せて、句調をなさず、同じことも『秋霧の深き今宵は鳴きわたるみ空の雁もわびしかるらん』とすれば二三の句のびて、全句の調とゝのひ候。されどよしとにては無之候。

吹くたびに雪のふれゝは久方の
むなしき空と思はざりけり

かやうなる所に久方の枕詞よからず候。この歌、腰にて靜まりてよからんや。御吟じあるべし。又風ともいはず吹くとばかりいへる急がしき調に、枕詞などあるべきならず。こは『風吹けば花とも雪のちるものをむなしき空と思ひけるかな』と申さばよき歌なるべし。

もず鳴きて尾花ちるさへさびしきに
夕日かげらふ猪名のふしはら

さへのテニヲハ强きによりて、下の句上聲に出で、あはれ少なく、秋の夕べの調にあらず、荒涼に聞ゆるなり。さへを去りて『尾花のちるもさびしきに』とすれば、下句去聲に出でゝあはれ深し。

梅の花なればぞきなく鶯を
われを訪ひぬと思ひけるかな

之は調ぶるにはあらで、理わるなり。ことわるは無理にことわると云ひてよし。調に從ひゆく理

なり。調なしにことわるは、旦那もなきに槍をふって行くが如し。氣の毒ならずや。

　甲斐かねは霞みそめけり武藏野の
　　野邊の小草も今やもゆらん

小草も今や萌ゆらんの語勢、曠大なる武藏野めかずや侍らん。垣根わたりにぞ似つかはしかるべき。又、甲斐が峰をいづくより見たる景色にか、武藏野をも思ひやりたる。其の處覺束なし。

　咲けばとて人も來て見ぬ山里は
　　花ものがれし心なるらん

咲けばとて、人も來て見ぬは來て見られたき心より云ふ語勢なり。さるを遁れし心とは、更に叶はず。早く散れとか、うつるもいとはじとか、何とかなるべきしかけなり。

　あさぼらけ初鶯をきゝしより
　　靜めがたくもなる心かな

これ、上下別々にして、繼上下の如し。上の句よみ立ての儘ならば、下の句は『都の友の待たれぬるかな』などせずては調おはず、又、下の句よみ立ての儘ならば、上句『我が宿の初花櫻さきしより』などならでは調おはず考ふべし。

際限なければ、引例はこれにて終るべく候。かく非難し來れるを見れば、調なるものは、非常に六つかしく相見え候へども、要は前述べたる如く、何事もらしくして、自然に從ふのみに候。古來多くの歌論は、皆この調を研究せしものにて、調だに自得ぜば、更に歌の修業なるものは無之候。

之を要するに、詩歌は、節調によりて起り、節調は、益々進歩して、種々の形式となりしも、歐州、及び、支那は幸にして、其の形式如何なる詩想をも包容するに足れるが故に、形式の巧拙と共に内

容の價値を問ひ、兩々車の双輪の如く、相駢馳して、比較的完全なる發達を遂げしも、我が國の歌は、奈良朝以降、雪月花は、戀の狹き範圍に限られ、其の詩想は次第に萎縮して、終に長歌は廢れ、三十一文字の短歌となりしが、故に茲に復雜なる思想を歌ふの便を失ひ、自然の結果として、全力を調の上に用ゐるに至る。所謂聲を以て、人を動かさんと試むるに至りしにて候。近時時勢の要求に應じ、新體詩なるものの興り、其の形式を定めんとするの傾向あり。或は、和歌の上にて改革意見を有するの人なきにあらざれども、上來說く所の節調あるものは、詩歌通有のものにて、殊に所謂調は、和歌の生命とも云ふべく、何人が、幾度如何なる改革をなすも、我が國に和歌あらん限りは、一指をも加ふる能はざるものに有之候。實は近頃地方新聞の文藝欄にて見る和歌には、往々三十一文字を並べしのみにて、和歌の名稱を附しかぬると思はるゝものありしより、聊か歌の調を論じてみんと、かくは筆執りしもの〻、旅中參考すべき書物もなく、甚だ下らぬ、長談義を試み候、春の日永の眠氣催しにもならばよし。ゆめ大方の諸君子に示すべきものには無之候あなかしこ。

（をはり）

叡運法師の月十首を讀む（承前）

讃岐　小西甚之助

あな面白き哉、以上十種の月景色。夜はひとつ、月はひとつの月ながら、やどれる影のとり〴〵よ。浮世に遠き山褄の月は、豊けき秋の田面の月と、相似るも、さやけさと、樂しさとは、見る人によりて相似て。ましら啼く山寺の月は、經史を繙く

學びの窓の月に、變はらざれど、靜けさと、ひかりさまとは、見る處に從ひて變はるぞかし。されば、かきわり〳〵鳥の影、さやかに照らす書齋の月は、彩どれる山水の面、あざらかにわたる書室の月と、風情、おのづから異り、黄金をさむるいちぐらにさす街の月は、藻屑やく烟にはゆる、浦邊の月と、趣、固より同じからざりけり。賤が伏屋のやれ廡洩る月、いかで必ずしも、川竹の流に歎つ袖の上の月と、其の哀れさ、ひとしきものと云はんやは。

法師が、此の月の歌、おの〳〵、其のけぢめをさやかに寫して、殘さん隈も渚照る、蘆の葉越しの難波の月影。我が心の水底に澄み徹りて、虧けて、うつろはぬ、すさびの球とありぬるこそ、かへす〴〵も、うれしかりけれ。今宵居待月のもとに、ひとり閑かに讀み了りて、清げさに耐へず、精華をやどす桂の露、硯に受けて、其のあとさきにそゞろ言をかくあん。

法の師か十くさの影と言の葉に
綴るもあはれ月の下露

(觀運法師は、浪華の言家、某寺の住僧にて、かの契沖法師に由緣深き圓珠庵は、法師か手に預らるゝ所なりときこゆ。因に記す)

大和めぐり(承前)

井上頼文

花の中宿

頼文いふ。萬治二年の春、飛鳥井大納言雅章卿の吉野紀行に、多武峯にてよめるとはしがきして

たつねきてこゝも櫻の峯つゝく
吉野初瀬の花の中やと

淡山神社

道の幸に、廿六日（寛政四年十一月なり）よべより雨ふり、けさはやみぬ。先本社に詣づ。大和はいづくも、古跡物ふりておぼゆるを、夫に引かへ、本社あらびに、廟塔の莊嚴いはんかたなし。殊に此のほど修復ありて、めもかゞやくばかりなり（中略）蒼輔ぬしの作詩

塔峰廟

明辟思二舟揖一　大家出二棟梁一　應レ機僵二大憝一　定レ令紐二乾綱一　婚好桃夭契　賞延二藤蔓一長　榮レ勤登二大鼎一　奉祀秘二神岡一　寶塔層雲外　玉床怪石傍　稱分太官酒　爐送御前香　像裂時統血　墳鳴或威祥　忠魂今未レ死　威靈護二百王一

栗原寺の露盤

寶物の中にあり。古色掬すべし。

道の幸に、栗原寺の塔の露盤。寺はたえぬるとて、露盤のみ、この寶藏にありと記せり。

ちなみに曰く。道の幸に、昔、聖靈院、又、護國院などいへる勅額ありけれども、傳はらず。尊圓親王眞跡の、息障明王院とある額の事も問ひたれど、行衛さだかならず。又、大職冠の碑、定惠和尚の碑なども、今はさだかならず。すべて、大和大納言の、紀州にうつされてのち、再興の所なれば、その時の退轉に、何事もは傳り侍らずといふ。郡山雜記には、天正の比、大職冠の社など、郡山へうつす。慶長のはじめ、増田右衛門尉、在城の時、又。多武峰にうつすと記せり。

とり。

あんら樹

道の幸に、本社のかたはらに、あんら樹といふ。天竺の木植てあり。葉は、落て木は、くわりんに似たり。果も、くわりんのごとしといふ。さまざまの功能あり。竺土のものゆゑ、文字もさだかならずといひき。後に、本草を見れば、續證類にのせて、菴羅果とかきたり。禹錫が註に葉を煎じてのめば、渇をいやすなど、功能をあげたり。又、術義に、東西洛に甚多と見えたるは、此の物に

や、猶たづぬべし。
と見ゆ。

氣津和既神社

上村、茂古森にあり。細川、上居、尾曾の三村の氏神なり。祭日は、十月二十日を用ゐるとぞ。祭神はつまびらかならず。大和志、奈良縣神社取調書神祇志料等にも縁起等の見るべきなし。されどこの社の祭神は何の神ありかの宮の祭神は何の命なりと、後世より强ておしあてに定むるよりも、詳かならぬぞかへりてめでたきや。千年も經へにけんと覺ゆる藤の蟠りたるは、雨よぶ龍の如し。又境内に瀧あり。高さ三丈ばかりなり。大木はなけれど、いとものふりたる林あり。ふるき祭器の破片、臼玉などありけなる處なれど、行くてをいそぎばかひなし。このわたりの社地より、臼玉のいづる所、こゝかしこにありと聞けり。質は、三輪山より出づるものと、おほかたおなじく粗製の品おほしと。また、まれには、粗製の、きはめて、細く長き管玉の鼠色なると、青黑き色のと出づることあり。また、鼠色小豆色等の曲玉の、きはめて小なるものありとぞ。

上居村

上居は、もと淨御を、字音に呼びなせるより誤れるものなるべし。此のわたりは、明日香の清御原宮の舊址にちかければ、しづかにさぐりもとめなば、歴史の參考となるべき事も多かるべきを。梟居の舊址は高市村大字阪田、字な都とて上居の地に接續せる地なりといふ。そのあたりの田畑などには、所謂人類學者が符標語なる朝鮮土器の破片散在して、千年のなごりやとゞめたらむ。行きて見まほしけれど、豫定の道路ならねばかひなし。

きよみ原きよきあすかの宮どころ

たつねまほしきこの夕かな

あすかの　きよみの宮に　あめのした　しろしめしける　すめらきの　おほみあらかの　あとところ　そことしきけば　ぬばたまの　夜となりぬとも　青山に　日がかくるとも　あさぢはら　つばら〳〵に　いにしへの　さまたつねむを　いしたふや　あまはせづかひ　このいそぐたひち　あはれ

と、なん、くちいでらる。

行く〳〵、みちの傍を見れば、畑のなか、小川の岸なぞに、句王つぼの破片めきたるもの散在せり。また、素焼のたかつきのごときもの、細かに破れたるも、いとおほかり。もとは完全なるうつはなりけんを、心なき農夫らの、鋤鍬もて無二無三に、うちくだきて捨てたるなりけり。陵墓のめぐりに立てたる、（人種學者がいふ）煙筒土器を拔き取りて、田間に水を通ずる土管となし、また、石槨を摧きて、石垣に積み、石棺を破て、小溝の橋となし、また、完全なるをば蓄水桶となし、甚しきに至りては、肥料を蓄ふる糞瓶とせる類も多しとか。いと、あぢきなき所業ならずや。思ひおこせばおのれ往時、山邊郡萱生の千塚の、密柿見に行きたりし時、ある農家の小便つぼの、異狀なるによりて、よく見れば、こはそもいかに、外は緻密なる縱橫小紋形、內は深く刻まれたる靑海波の紋樣にて、千年以前の逸品なりき。あはれ、いにしへを徵すべき千古の物品の、いたづらに破壞湮滅に歸するは遺憾の極ならずや。よろしく政府の一事業として、これが保存の道を講ぜられたきものなりかし。



しのぶ旅路（二）

永潜生

米山寺は、土肥、小早川兩氏の累世の菩提寺にして、實平公などの墓もありと云へば、其の創立はいかに古き時なりけん。公の畫像もあるよしなれど、住持留守にて、縁起なども詳かにするを得ず、遺憾云ふばかりなし。

住僧居らず、禪宗寺の秋の蟬

こゝより、一丁餘の處に墓所ありと云ふに、留守居して鍵あけさせて詣づ。方二十間もあらんかし黒き棚もて、圍みたるが、砂清らして落葉だになし。二ならびに敷石して、二十基の墓を据う。其の形、大さなど、皆先に見たるものに同じくて、五重の塔の形をなし。大なる、梵字などのめたる樣なれど、苔むして見わくべくもあらず。實平、景隆公の墓も、中にあり。いと古めきたる同じ形ちせる墓の數多たちならぶさま、さながら佛の靈地をも見まひたらん心地せられてたふとし。

古へもいまもかはらずありきてふ
おくつきを見れば尊くもあるか

げにしるくしめだつべきものは、おくつきにぞありける。酒を灑で、古へを吊らふ。松ふく風もむかしを咽ぶに似たり。

いざゝらば、峯のあらしにことゝはゝ
すぎしむかしの武夫のゆめ

感慨無量さらに今樣を歌うて去る

峯の松かぜこゝろあらば　我にかたれよ古

へゆ　たてるおくつき動きなく　いつまでかくてぞありふべき

本郷川を渡りて、佛通寺に向ふ途すがら、城山の間を過ぐ、此の山は、嘗つて實平公の居城を構へしよし云ひ傳ふ。前には本郷川の大流を帯び、後ろには、眞良の郷地を控へ、山たかく、巖急にて要害ならひなし。太平記の作者が、山高くして、一片の白雲峯を埋め、谷深うして、萬仭の青岩路を遮ぎるとか云ひけん。笠置の山にもよく似かよひたりなど、父君はの給ふ。この山左右の二つに分かれ、左の山頂には、岩井あり。如何なる旱にも、涸れしことなしと云ふ。山の間に流れあり。水いと清く掬ひて、午餉などすませつ。

ふることを思ひいてつゝたちむかふ
城山を見ればをゝしくもあるか

元暦元年土肥實平、梶原景時を以て、美作、備前、備中、備後、播摩の守護とせられしよし、東鑑にも見えたれば、彼の時より土肥氏は、此の地に來り、こゝに築きたりけん。小早川氏は、土肥氏よりわかれ出でたるよし聞き侍れど、如何なる系圖あるにか、折もあらば詳しくしらべまほしくこそ。

日照り亘りて、なか〳〵に暑し。一里餘にして、山門につく。こゝより本寺まで、二十二丁ありと云ふに、氣を勵まして、進む。路は溪水に沿ひて折れめくりたれば、水の音は淸うして、耳を洗ひ吹く風は涼うして、袂に充てり。三ッ四ッ土橋をも渡りてゆく。溪いよ〳〵狹うして、水いよ〳〵急なり。

谷ふかみゆく水音はたかけれど
さかひはいよゝしづけかりけり

と見る行手のかたにあたりて、巨なる巖の聳ゆる

あり。仰ぎ見れば、千仭の絶壁、天ッ大神の削り成せるか如く、生氣動きて躍り出でなんとす。蘚ふり、水滴りて老い松などの茂り合ひたるさま、さながら冠つけたる仁王のをたけびに踏みたけびて立ち玉ふに似たり。下ゆく水は、猛けりにたけり、狂ひにくるひて、みづく白玉を砕くがごとく、白金の龍の跳るに似たり。山鳴り、谷どよみて、蟬の聲さへ聞えず、失はれしと見し路は、これより轉じて、巖に沿ひてめぐる。今迄狹みたりし溪は、やう／＼に開けゆきて、山の姿もいとおほらかなり。竹の林は打つゞきて、近く青葉の色に榮え峯のむら松は、茂り合ひて、遠く翠の黛をこらす、其の間だ、堂塔などの、こゝかしこに見え隱れするさま、さながら描ける仙境に似たり。

たにの水峯のあらしをしるべにて
思はぬ里に我は來にけり

流に沿ひて溯るに、幾かゝへもあらん、古き松杉の枝打かはし、むら立ちて照る日の光をも遮へさる。ゆきかふ人も絶えてなく水の音のみいよいよ清し。

ゆきかよふ人もとたえし山里は
水の音のみたかくぞありける

旅のらくがき

明治三十二年熊本の旅舍にて　深山庵主人

(二)熊本にて見し可笑しき姓

百姓何作、町人何屋何兵衛と呼び捨てゝ、姓といふものなかりし封建の世廢れて、名字許さるゝことなりしより、俄に思ひ／＼に姓を作り、或は日頃信仰する人の姓を其の儘に名乘りしもあれど中には、戸籍吏のなすが儘になしたるもあり。左

れば、溝の側に住むとて、溝端と名乗らしめ、川岸のにあるは川岸、庭前に柿の樹のあるとて、大柿、戸籍帳簿の第一頁に記入したれば、書初と呼ばしめたりなど其の昔の思ひ出されて、可笑しきが數多あるは、何處の里もおなじとなり。熊本に來てよりも、耳なれぬ姓多く見もし、聞きもしたれど、御幸野、蔚山、蔡などは、何れ由緒のあらんかし。丁、嘉悅、迫、水民、三角、鬼丸、百々は、奇と云はゞ奇なれども、他國に例なきにはあらず。我が就中、不思議とよりも抱腹千萬に思ひしは、騎馬、父母、大笑事、芝鬼など云ふ姓なり。我が知れる騎馬は、伯樂を業とせるも、名詮自稱とて可笑し。父母と云ふは、恐くは、他に類なからん、大笑事に至りては、何とも云はん方なし。ダイショウジと讀むにやあらん。オホワラヒゴトと讀むにやあらん。詳かならねど、滑稽を弄するも、亦極まれりと云ふ可し。右近允、天本、割石有働、來福なども、少なき姓なるべし。尚はあれど左のみはとて玆には擧げず。

故園の秋

山岡螢雪

はや夕暮の秋の空、浪も散るなり白露の、玉をつらねて葺くとかや、軒の雨、古き言の葉取り添へて、手向ぞまこと眞鳥住む、うなでの森の落葉を、拾ひ上げいざや葺かうよ、拾ふ汐干のたま〱も、折を得たりと夕暮の、月すでに出汐の、影ながら葺かうよ、かげもしげきの八重榊、葉色を添へて葺く程に、重なる軒の忍草、忘れたり葺きさして、少しは殘せ名を聞くも、葺き合はせずの、神の御假屋葺き殘せ、しかも、月の夜すがら影諸

共に、我も出で、洩る影は、天照す神代の秋の月を、いざやおがめ明かさんとぞ、謠曲鵜飼に見えける。實に、今も昔も、月明の夜半は更なり、露ふかき野邊の朝、紅葉の影うつらう山家の夕、いづれも、秋の景色程、詩趣おほきはあらじ。

京傳は、落日烟を帶びて碧靄を生じ、彩雲水に映きて紅の光を散し、釣りする翁は、舟を移して家路に急ぎ、群れ居る鷺は友を集めて沙汀に下り、蘆花の雪をふらす濱風は、苔清き軒端を繞り、赤蜻蛉の紅葉を散らす 枯枝にふくれ聲ふる山鳩も、塒にかへりて、はやたそがれどきなれば、と云ひ。更に又、木々の蔦、よき程に染め做して、錦を織かけたるが如し、彼の御室の兒を挑撥して、割り籠を埋め失ひけん由なし事さへ、思ひ出でられ、倘、をちこちを徘徊するに、秋の日早く西に傾き、尾上を隔て、さ牡鹿の妻呼ぶ聲も聞ゆなり、とは曲亭が觀。

あはれ、夏の暑の苦しさに、待ちまうけたる、秋もいつしか、殘り少き晩秋とはなり、啾々たる西風破窓を射て、燈火きえやすく、輪月皎潔にして、銀漢西に横はり、天空開豁なる處、耿々たる光、疎屋を穿ちて夢なり難く、秋聲颯々樹梢になり、白露團々として、地上に落つ、里童や、吹きすさぶ笛聲、朗々として水に和し、人をして、翛然、高情清意あらしむ、好箇の節、我に數日の閑あり、徒に、紅塵堆裡の陋屋に蟄し、盛夏の頃も、倘、且、業をいそしみて、勞れはてたる身を、にがにがしく送らんよりは、いで故園の秋をおとづれ、夕は月を踏で、氣を養ひ、朝は郊外に散策して、眼を喜ばしめんにはと、思ひ立つや、否や、仕度そこ〳〵に旅裝して、日頃、教をうくる、川崎先生を訪ひ、都には最珍しき栗飯を澤にいたゞき、

種々の物たまはりなどして、時針の將に午後九時を示すとき、先生が厚き惠の人車に、打ち乘りて行く程に、秋雨しとしとゝして降り來り、やがて、風われ雨舞ひ、頻に車のホロの中まで降り込み、衣を濕して、五體覺えず寒戰せり、さらでだに、涙もろき身の、平生書窓の下、沾しつくしたる弊衣を、たま〳〵、故園にかへるさ、千里の長風に、乾かしめむとするに、反りて、ぬれまさらしむる、天の心の情なき。

去る程に、我が國第一のにぎはしき、新橋停車場に着き、暫しやすらうひまもなく、十時と云ふに、予が乘込みし、神戸行の汽車は、雨を犯して、汽笛一聲はや都門を離れ、轟々の響につれて、烟突より吐き出す小火の、雨中に散點して、さながら螢の飛が如く、高低明滅、飄として中空にあがり、忽として、草際に飛び來る樣の、いとをかし。

車中は、さまで雜沓せざりしかども、我坐近くに、何處の人々なるか、男は豪商と思しきに、其の妻のまだ年若きが、顏はうるはしとにはあらねど、姿いと清楚なりき、年老たるは、その母にや、五十路ばかりなるを、彼の女が甲斐々々しく、脊を撫でつゝ、四方八方の話などして嬉ばしめ、母なる人の、くど〳〵しく問ふに、一々丁寧に答へ、人々が眠り催す頃も、彼れは、猶、厭たる氣色少しも見えぬには、車中の旅客みな、感ぜぬはなく、我も、そが孝心の深き振舞には、ひそかに感涙を墮したり。

拾人十樣とは、誰が云ひ初めけむ、中に、生意氣盛の書生、三四人の一組が、ブランデーなど傾けつゝ、縺るゝ舌にわめく如き聲して、われは顏に、陳腐なる古詩、又は、晩翠學士が、嘗て、詠じたる富嶽の歌など、高らかに唄ひ、傍若無人のさま、

實に、狂とや云ふべく、されど、眞夜中近きころは、流石の書生ばらも、吠えくたびれしにや、頓と、なりをしづめ、車中漸く靜なり。
月なきに、かてゝ加へて、降りしきる雨夜なれば、車窓の外は更に眺めなく、我も、車の動揺するにつれて、きれ〳〵の夢、はかなくも結びぬ。
堀ノ内、堀ノ内、と驛夫が、勇ましく呼ぶ聲に驚きて、眠りさめしは、午前六時、東の方よりうつくしく、車窓に輝く朝暾の、昨日にまして今朝の晴天には、思はず笑をたゝへたり、既にして、車は馳せて、濱名の湖邊をすぎぬ。
湖とは、昔のことにて、今を去る事、凡、四百二十七年前、後土御門の御代、明應年間、海嘯の爲に一方破壊して、今は全く灣となり、漫々たる太洋より汽船を入るべく、灣の口を、今切と稱へ、蜿蜒長蛇の如き、鐵橋こゝにあり。遠江の國名、蓋し、琵琶湖の近江の國名に於けるに、對して、此の湖より、起りたるものなりとか。
盈々たる一奩の碧水、全面玲瓏として、さながら、明鏡を磨けるが如く、汀上の林樹、亭々として、輕靄未だ散せず、布帆早旭日を受けて、檣頭十幅の紅を染め、漁郎の棹歌水聲に和して高く、飛鳧洛雁、悠々蘆荻の間に隱閃す、此の方に重疊せる連山は、秋葉つゞき、遠、參の境に赴き、わが曾て假住せし處も、彼方に瞥見せられ、坐ろに、故人と相見るの想ありき。
瀲灔として、水清き江面、拭ふが如く洗ふに似、湖畔の漁家、模糊として、白砂青松の間に參差たる、あはれ、自然美の粹、天眞爛熳たる好箇のモデル、我に、雪舟の筆あらしめんには、寫し得て、今や、パリーの萬國博覽會に出品し、我が日本畫をあざけりし、彼等碧眼紅毛の荒膽を、挫ぎくれ

んものを。
二川驛を過ぐれば、右に、老松幾千、奇岩怪石の間に散綴し、肉落ちて仙骨を顯したる、大岩山の頂に、觀音薩埵丈六の銅像、屹として立ち玉ふを見る、風光の佳、壯觀の趣、さながら一幅の畫の如し。山脚に、櫻樹數百ありて、彌生の花、仲秋の月に名あり。間もなく、豐橋驛にて車を、吉田線に乘換へ、名に高き豐川稻荷をよぎれば、林鶴梁が、嘗て、三河に奇山なし、一の石卷あるのみと、世の人に紹介したる、神韻縹緲たる石卷を、連山の中にみとめ、左に、崢嶸たる當國第一の高山、本宮を眺め、車窓より、一宮に鎭ります、國幣小社砥鹿の神社を伏し拜みつゝ、東上驛に至りて、車を下れば、左右のものには少しも目を觸れず、只だ、歩をいそぎ、道を迂廻して、先づ、故き父母が、奥都城にぬかづき、

報いんと思ばいつか親はなし
　御墓のつゆに袖ぬらすとは

と。一首の國風を手向て、起たんとすれば、四面寂寥として、夕陽西に沒し、秋風冷やかに、身骨を徹し、樹陰に宿る晩鴉、啞々として聲あはれなるにいかでか、多涙多血のわれ、悵然、斷腸の思ひに堪へざらんや。

漸くにして、行く程に、嬉しや、我が幼きより、掬育し玉ひたる、かりの父母が在ますなる、家も、彼方の木の間に、見え隱れする樣になりぬ。何事か語り玉ふ母君の聲も、兄君の愛兒の泣き聲も、聞え來りぬ。尙心を止て聞く程に、後ろの方にて、雞の鳴聲頻にするより、ふと顧みんとすれば、こはそもいかに、我は、溫き臥戸の中にありて、父母兄弟と枕を並べて、眠り、昨日來し旅路、更にまた、夢にて、くりかへしたるなりけり。

夜やあけぬらむ、雞いよ〳〵鳴きて戸の隙白み初めぬ。とく起き出で丶雨戸をひらけば、浩々たる長空皦然一點の雲翳を見ざるに、只一つあはれに取り殘されたる曉星の、いともさびしく、熒々として、吉祥の半腹に、一もと高き杉の梢に懸りて、影寒く、顔まだ洗はざるに、淅々たる庭前の松籟に、耳先づ清められて、清氣骨に透るを覺ゆ。

やがて、我が幼遊びのすさみに、名も知れぬ草木など、こ丶かしこに植ゑ込みては、父上の御叱を受けたることある、古き友てふ、なつかしき庭に出で丶、天を仰いで佇めば、いつか東天紅を流してうつくしく、彼方の茂林よりは、明け鴉二つ三つ鳴き出づる聲も聞ゆ。あはれ、人の心の可笑さは、公冶長にあらぬ、我のいかでか鳥のなき聲、き丶分くる事出來得らるべき、唯啞々と聞くばかりなるに、夕は其の聲をき丶て、懷舊の情たへがたく、腸をちぎらんばかり悲みしに、今朝は何となく、爽快に小躍せんばかりなり。居は氣を移し養は體を移すとは、誠なる哉、古人が言の葉の、いつはりならず。

夜全く明けぬれば、顔洗はんとて、萩深き庭の隅なる、井端に至りたるに、あな、あはれに又、可愛らしくも朝良のなかば枯れかゝりたるに、覺束なくも釣瓶の竿にすがりて、小さき花一輪咲き出でたる床しさは、

朝良につるべとられてもらひ水

と口吟みけむも、實にこ丶の風情なりと思ひ浮べども、俗おほき我れには、一句半句も得出でず、又、貰ひ水せんも、片山里の事にしあれば、隣家もいと遠きに心ならずも、蔓を萩の上に移して水を汲めば、いつの間にか、散り込みし萩の花に、きばみたる葉も掬はれたり。

我は此の清き趣味ある水に、顔を洗ひ口を嗽ぎ終りて、前山に登れば、茸を漁らんとてか、里の童四五人、手毎に目籠を提げて、露草を分け色ある朽葉を拂ひ行くに遇ひぬ。秋光粛殺として、紅粧染めて未だ乾かず、樹々の梢、眞紅なるあり黄なるあり、そが中に葱蒼として、緑なる常盤木の疎々なるあり、滿崖の楓葉爛然として霜に飽き、松檜是に交り、微風樹を搖かして灼々たる綿を綴る、是ぞ、蜀江の錦にあらずば、便ち是れ、蓬萊五色の雲かと疑ふ。秋色の目に美しく、女郎花のなよやかに、桔梗のやさしき、野邊の千草も皆衰へて、最物哀れなるに、獨り菊のみは、秋知り顔に咲き亂れ、芳香四邊にあまねく、奇芳仙馥、鼻を撲ち衣に遍り、秀麗愛すべく、見上れば幾群の秋鳥雲に入りて還らず、見下せば、いさゝ小川の清流、潺湲として、自然の琴を奏づるが如く、足下に白布を曝すが如し。

右顧すれば、萬頃の稻田深き處虫聲茂く、穰々たる黄禾黄金の筵を敷き、左眄すれば、蕎麥畑相連り、其の花皚々として白銀の如く、こゝかしこに案山子の立てるも、あはれに見ゆ。天朗かに氣澄み、閑然として幽、廓然として曠、山に川に野に畑に、滿目一として詩的ならざるはなき、田舍の風光、杳として身仙境に遊ぶが如く、秋情幽邃なるこみちを過り、我が柴の折門に歸りぬ。

いざ共にまどひして、久しぶりの麥飯を味はゞや。斯て朝餉を終へ、舊き友垣をおとづれては、友の情の、厚きもてなしを受けつ、夕陽西に舂き四山に反照して、白雲彩霞、江楓翠松相映じ、其の美艶陽の花に勝る。杜樊川が所謂

停レ車坐愛楓林晩。霜葉紅ニ於二月花一。

と吟じたるを、まのあたり歸路に眺めつゝ、其の

妙味を感じぬ。

一滴十里水清き豐川の流れ、淙々として物すごく、明月高く松風天籟を吹き、虫聲悽咽、露花嬋妍玉を跳らす、水天一色にして風月双び清き窓の下、靄然たるまどひに、四方の話などして、夜の更くるを知らざりき。

幸か、はた不幸かは知らねども、いつまでも、山紫水明の間に逍遙して、風月を翫び、神仙を學ぶ閑散の身にあらねば、名殘をしくも、故園の秀色を、汽笛一聲に送り、長程一日、晩鐘暮靄を渡りて、幽にきこゆる頃新橋につきて、茲に再び、塵寰中の俗人とはなりぬ。

方言集（三）

萬歳生

三河國南設樂郡の東部に行はるもの

捨てる　フテル、・ホーカル、

行きませぬか　イカマイカ、イカンカン、

わたしの家　チラントコ、

左樣ですか　ソーカヘ、ゾーカン

見出す　ミダイタ、

倒れた　コロンダ、

打つた　ブンナグッタ、

左樣なら　アバエン、（アバエンの返事）ハイエン、

此言葉は小兒に多し

さうしますと　ソースルトサイガ、

下さい　クレンカン、

之れは、面白くはないと、人に語る言葉、

コリャーチモシロクナイノン、

今日、はたしは何々したゞけ、と云ふ時に
キヨーワシヤーナニヨーシタブンダ、
人の言葉の明白ならざる時、二度問ひ返す言葉
アエ、ナンダエ　こは重に下等人の言葉なり
度々　タンビ〳〵、
歩め　アヨベ
掻きさいた　カキミシツタ、　カキムシツタ、
僧侶　オボサ、　サツサマ、
子供等　コドモントー、　コドモンタチ、
乞食　コンヂー、
大きい　デケー、　デツカイ、　下等人に多き言葉
小さい　チツコイ、
自分をむ　ワシ、　オレ、　ワイラ、
他人をば　オシ、　アンタ、　オマヘ、　下等人の用ふる言
は　オメー、　テメー、
御食べなさい、又は、座敷などに御上りなさい、
とも兩樣に用ふる言葉　アガリン

何を云ふのだ
ナニヨーコク、　ナニヨーヌカス、　下等人に多し、
有りましたか
アツタツカン、　アツタカン
何處へ行きます
ドコヘイクン、普通の言　ドケーウシヤーガルンダ、下等人の言
夫れでは　ソイヂヤー
物を人に與へる時
アゲルニノン、　アゲルゾン、
御いでなさい、又は、そこに居れと兩樣の言葉
オイデン、
行きましたから、イツタモンダデ、
之を知りなさるか
コイツオーシツトルカン、
人のよびし時の返事
アー、　ハー、　ハイ、　ヘー、　オー、
當郡地方は、東京と左したる相違もなく、只々、其
の聞き惡き、言の葉のみを記しぬ。



文林

遠樹紅葉　東久世通禧

初霜はいつかゝりけんうちわたす
むかひの岡はもみぢしてけり

秋山路　高崎正風

樫のみのひとりこゆるか惜しき哉
さくももみぢもおほき山路を

菊をかざして　鍋島直大

何方のかへりなるらんきくのはな
くる人ごとにをりてかざすは

橋邊鴈　水野忠敬

わたりゆく橋のむかひに聞ゆなり
川かとをみきはつかりのこゑ

岸菊　宗重望

山かはのきしへに生るきくのはな
ちりの外なるかけそうつれる

雨後紅葉　宮地嚴夫

美はしく雨にぬるてのもみぢ葉は
つゆのひぬ間にみるかへりけり

夜間水聲　北郷久政

ぬば玉の夜はうしみつになりぬ覽
川瀬のみつのおともよどめる

曉月　坂正臣

朝寢かみけつりもやらすさし櫛の
わかつき月夜をながめけるかな

秋雨　鎌田正夫

虫の音もまれにきこえてむら雨の
ふるおとさびし秋のゆふぐれ

秋晴 大口鯛二

こゝちよく晴渡りたるはそらに
見ゆるは秋のひかりなりけり

曉露 蜂須賀隨子

朝かほはまたいきたなく見れども
ひとりおきたるわかつきの露

田家秋雨 鍋島榮子

實りたる秋田のすゞめこゑたえて
ゆふへ淋しくむらさめぞふる

月夜こぐかた 前田朗子

夜網ひく小舟なるらんてるつきに
そむきて山のかげをたどるは

菊香隨風 南鄉柳子

ほとせまき庭のむら菊さきそめて
此の朝かせの香にはほひけり

雨中菊 日野西廣子

降りそゝぐ雨のしつくに照そひて
やみにも見ゆるしら菊のはな

對菊待月 入澤常子

月まちてみんとおもひしわが庭の
まがきの菊にあめかゝるなり

菊滿庭 小川直子

むら菊はこゝろのまゝに咲みたれ
遣り水だにもみえぬにはかな

池邊菊 中村禮子

はすの葉のかれたる庭の池きしに
匂ひそめたるしらきくのはな

河上菊 服部磯子

足ひきの山路をくれはたにかはの
そこにもうつるしら菊のはな

秋野遊 河村重子

八千草の花のむしろに日はくれて
のもりかやどに月やまたまし

○砧の聲

小西甚之助

から衣いろは千種にわかるゝを
　おとうつ音のあへて悲しき

燈火のあるか無かにふけゆきて
　ほそる砧の聲をきく哉

哀れさを添へてきけとや曉の
　かねに傳へてうつきぬた哉

ふくる夜の風に砕けて衣川
　うつ音寒し岸のしら波

歸りこん舟をまつもる月影に
　須磨の蜑人衣うつあり

月すめる蘆邊の里はさ夜砧
　落ちくる鴈の影もうつらん

寢かてに窓の戸推せばさ夜砧
　きくの垣根に音ぞ匂へる

雜報



●御救恤　天皇皇后兩陛下には、いぬる九月十四日臺灣に於ける暴風雨被害の狀況を聞こし召され、御救恤として罹災者一同へ、金千五百圓を下賜あらせられたり。げに、天雲のむかふすを限り、たにくゞのさはたるきはみ、大御恩頼をかゞふらぬ民草とてはあらゆざめり。あゝ、たふときかも。

●東宮御盛徳　皇太子殿下には去る二十一日、小倉より熊本への御車中に於て、御迎ひの爲小倉の御館へ伺候し、夫より扈從せる徳久熊本縣知事に向はせ給ひて、縣治の情態、農作並に害蟲驅除

の實況、教育の振否殊に濟々黌の沿革、及び、發達の次第、人情風俗より赤十字、武德會等の事柄等仔細に御下問遊ばされ、知事の奉答を聞召し、何要項に就て、御下問を重ねさせられ、數々難有御言葉をも賜ひたる由にて、知事は勿論御陪乘の人々も、坐に感泣に咽びたる趣に承はるが、何時もながら御盛德の程恐れ多き事共なり。附けて記す、熊本御駐輿中獻上品願出での中にて、御許容遊ばされたるは左の品々ありと申す。

生鯉鯛三盞　細川侯一門▲神代杉板一枚、阿蘇寫眞二枚　阿蘇男▲鯰九頭　松井男▲生肴二籠　伊瀬知師團長、德久〻事▲生鮎三盞　渡邊敬生▲肥後名所傳蹟寫眞數十枚　各學校

▲また殿下には、去る二十日九州中原村に於て、步兵第十二旅團の演習を御覽ぜられ、御滿足の御模樣にて、旅團長の竹內少將へ益々勉勵せよとの令旨を賜りしかば、少將は感泣の餘り「軍さ人勇まさらめや　いた〻ける日嗣の皇子のけふの御言葉」と詠じ御答を奉れりと。

◎山室山神社百年祭に就て、　贈正四位本居宣長大人を祀れる伊勢松坂町の山室山神社は、明治十六年創造せし儘なるより、今や大破に及べり。然るに明年十一月は、大人の一百年祭に當るを以て、社殿を繕修し、且保存の法を設けんため、基金として本年十二月盡日迄に、一萬二千圓を募集せん計畫にて、汎く國風同好の士に向ひて、其の主意書を頒布したるよし。

◎小楠公母の碑　下田歌子、菊地順子、西村銀子等諸子發起にて、今回河內四條畷、小楠公墓地、地域に小楠公母の碑を建つる企あり、本年中に寄附金を募り、來年四月に竣工する見込ありと。

◎九條蓬子姬の御入輿　東宮妃殿下の御實妹蓬子姬には、彌々來る廿一日、東京御出發、京都澁谷男爵家へ御入輿に付き、昨十六日九條家より、

數十個の荷物を輸送され、京都よりは同家の家從等御迎として上京し、姫には九條家の伊藤家令及、家從一名御附、女中一名附添ひ、廿一日の一番滊車にて發途の御準備中なりと云ふ。

●いその眞淑（木村園子報）　阿部いそ女は、石狩國厚田郡別戸刈村の漁夫、一の戸萬次郎の長女にして、萬次郎は、元青森縣の農夫なりしが、夙く本道に移りて、各地に流寓し、いそ女は、其の貧困の間に成育せられしが、不幸は荒波の重ねて寄せ來るが如く、同女九歲の時生みの母死去られ、父の一人して養育すること難ければ、仝じ國の札幌郡豊平村の阿部仁太郎といふ人慈悲深き人にて、且つ、其人の妻は、幸ひ緣者なれば、いで養育を賴まんと、遙々娘を連れて來りしかば、仁太郎夫婦ともに喜びて、承諾ひ已れが長子初太郎に妻はせんとて、敎育に力を盡しゝかば、いそ女は、原より怜悧の性にて、其の祖父、並に、舅姑に、能く事へ、數多の弟妹にも親しく交りて眞に同胞もたゞならざりき。又舅姑も、已が生子の如く慈しみ團欒の温き中に何時しか、憂き事の襲ひ來りて、夫初太郎は、脊髓に病にかゝり、五歲が間立つ居寢起も自由ならざりしかば、或は病院に入りて療治をなし、又は、家に居りて病を養ふなど、永き年月の中、湯藥の事は言ふに及ばず、朝夕の取扱至らぬ隈もなく、心を盡し、尙、舊姑に事ふるなど、露おこたることとなし。其の誠心を盡しゝ甲斐のありて、追々夫の病も怠りぬ。されど其の後、祖父長病にかゝり、物狂はしくなり行きければ、取扱ひもいみじう心を要ひ常に傍らに付添へ、心を慰め、手足を揉み摩りなどし、且つ好むものは、易すう得がたきものにても、自ら求めて之を進むるなど、いたらぬく

まもなかりしど、遂に歸らぬ旅途に趣かれしかば、愁み歎くこと一方ならざりき。其の後、夫婦の中睦じく、一男二女を設けたりしが、夫は兎角病勝にて、一日もやすき日とてなく、其の上去る二十九年の夏、熱病に侵され、次第に重なりまさりて遂に病院に入り、療養せしが、其の間の心盡しは、實に筆紙に盡しがたく、病の床に付き添へて、看護の暇には、一里餘の所を朝夕家に歸りて、父母を見舞ひ、子弟の所置するなど人の及ばぬ事のみ多かりき。兎角するほどに日を追うておこたりしも原より虚弱の身にしあれば、益々多病となりて、去る三十年の秋の頃より、二里餘離たりたる山里に、己が農園ありて、幽閑なれば、之に別莊を作りて、病を養ひ、傍ら、農夫の監督をなして居たりしが、其の後いそ女は、獨り舅姑に事へ、且つ能く、夫の留守を守り、其の弟妹、及ひ、己が子を併せて、八人の子女を己が子の如く慈み育て其の家富めるを以て召し使ふ女もあるなれど、其手を借らずして、自ら飲食を調理して、舊姑に進め、時々夫の方を見舞ひて、病氣などの看護に行くことあれど、風雪にかゝはらず、必ず、其の日の内に歸りて、舊姑の心を慰め、子弟を保護し、能く貞節にして變ることなし。夫も、閑靜の地に居りてより、其の身も漸く健康に復せしかど、今は、其の別莊の一部を以て郵便電信局となし、自ら局長として、能く周到に職務勉强の譽れあり。舅は、又多年公益に盡して功績顯はれ、去年の春、藍綬褒章を賜はりて、之を賞せらる。實にかく一家擧りて、善行はまれあるは、誰が内助ぞ。

●片木母子の善行　南泉郡、北信達村、大字岡中、片木爲吉の母ふさは、天資、質直に怜悧く、慶應元年九月同村某に嫁し、龍太郎、爲吉、義

藏を生む、夫某は、村內中等の資產を有し、呉服商を營むも、性質懶惰にして、生業を怠り、常に遊興を好み、處々に妾を蓄ふ。されどふさは、妬心を抱かざるのみか能く家事を整理し、且つ三子を養育し、何れも、小學校に入らしめたり。三子も、亦、能く母の志を承け、餘暇あれば、他に通學する等、黽勉敢へて怠ることなし。夫某、尙改悛めず、爾來、古道具商に轉業すと雖、其行爲、前日に異ならず、故を以て、漸く家產を傾け、遂に妻ふさと離婚す。ふさは、協議の上、二男爲吉を携へ、實家片木家に歸り、瑣々たる古着行商に從事し、纔に、母子の口を糊するも、爲吉の敎育を怠らず、二十五年三月片木家より分家し、爲吉を戶主となし、益業務を努む、三男義藏は、父の家に遺存し、能く繼母に事へ、年尙幼りしと雖も、父の行爲に對し、再三諫言するも、父の怒に

觸れたることなし。然れども、父の行爲の遂に改悛めざるを知り、身を以て、實母ふさに投ず、ふさ恩愛の情に堪へず、貧苦を顧みず、之を養ふ。義藏幼より學を好み、漸く長ずるに及び、文學に志すと雖、學資給せず、ふさは其の志を達せしめんと欲し、寒夜と炎晝とを問はず、業務に精勵し、纔に、之が學資を給せり。義藏は、遂に乙種檢定を經て、小學校本科准敎員より、更に進んで、正敎員となるに至れり。義藏一朝感ずる所ありて、身を軍籍に投せんとするも、學資の給すべきなし。依て、之を實母に謀る。ふさ、之を諾し、且つ、之を奬勵す。同二十九年十一月義藏東京に趣き、陸軍士官候補生たるに必要の學科を修め、同三十一年四月試驗を受けしも、不幸にして落第せり。此の間ふさは、毎月若干の學資を給す。爾來義藏學資に窮すと雖、初念尙怠ず麴町區役所の書

記を勤め、其の餘暇を以て、國民英學會と數學專修義塾とに、通學せり。後、區役所書記を辭し、衆議院書記局に雇はれ、和佛法律學校に通學し、今日に至れり。而して、本年四月、栃木縣に於て、普通文官試驗を受け、受驗者三百三十名に對し合格者五十一名中義藏は、第七席の優等を占めたりと云ふ。然ども、文官は、其の志にあらざるを以て、仕官せず、唯自己の學力の如何を實驗せし爲已なりと。義藏人と爲り、活潑にして、膽力あり。且つ雄辯强記なり。其の在京中毎日曜日には、必ず書面を以て、母の安否を問ひ、且自己の健全を報ずるを例とせり。又、朋友に對するに信義を以てす。故に往々之に感化せらるゝと云ふ。義藏嘗て、泉南郡六尾尋常小學校在職中、他校より厚く聘せんと欲するものあるも、皆謝絶して曰く、敎育者たる者、豈瑣々たる名利に趨り、進止を決すべきものあらんや。殊に本村の如き僻地に奉職するもの少きに於てをやと、世の敎育者たるもの義藏氏に對して、愧づる所なくば幸なり。二男爲吉はふさが、敎育に依り、小學校を卒業し、爾來米商を營み、ふさは、高齢なるにも拘らず、尚、古着行商を營み、現今は、家屋幷に、敷地を所有するに至り、村内細民中の上部に在りて、村内に於ても、其の善行を賞賛せざるものなしと、實に斯の母ありて、斯の子あり。世の母子たるもの鑑みざるべけんや。

●婦人會の消息　日本婦人會例會はいにし二十七日午後一時より華族女學校附屬小學校内に開會せられたりしが。閑院宮御息所殿下を始め奉り、毛利侯爵北堂、德州公爵夫人、岩倉公爵夫人、鍋島侯爵夫人等二百餘名來會し、小貝貞子の『淸韓漫遊談』毛利五郎氏の『日本婦人の將來』と題する演説あり、午後四時卅分頃散會せしと。▲日本体育會女子部去月六日第一回例會に於て、久保田讓氏は我國民は、智識學問勇氣、其の他多くの點に於て、世界の各國に遜色なしといへども、獨り体育、殊に女子の体育のみは、殘念

ながら最劣等にありといふより說き起して、滔々其救濟法に及び、最後に今日男子が見て以て美人とする所のものは、肺病的婦人なれども、遠からずして、此の誤の理想は一變し、結婚の第一條件は、身体の整齊したる健康といふ事にならんと論結し、次に醫學博士三宅秀氏は体育の發達を妨ぐる罪人は文明なりといふ奇警の演說（七十五頁參看）をなし、最後に先頃英國より歸朝したる安井哲子氏は、英國女子の体育と題して、一時間餘の長演說をなしぬ。▲仙臺婦人矯風會は、去月六日島田三郎氏を招待して演說を請ひしに、氏は喜んで應じ「婦人の社會に於ける位地」といふ題にて、歐米各國婦人の勢力より、我國婦人の境遇に論及し、長時間の演說を試みたりと、▲長野婦人會は、去る八日慈善音樂會を催しも、得たる金二百餘圓を悉く恤兵部に寄附したりと。▲上越婦人修養會は去月末日高田市寺町光照寺にて、第六例會を開きたるが、來會者五十餘名、贊助員會員の有益なる談話ありきと。▲伊豫國今治婦人會は去月末日同地小學校にて發會式をあげたり、出席者百八十名、まづ、役員の撰擧を行ひしに會長には小松崎吉郎氏副會長には黒川通成當撰し、夫より小松崎氏祝詞を兼ねて、今後の希望をのべ、次に永井高等女學校教員の同會來歷談あり、次に西田書記官以下の祝詞ありて、式終りて茶菓の間に、打解けたる談話をなし、紀念のため撮影して散會せりと。▲廣島婦人慈善會は、去月末日同市慈善學院にて開會せり、來會者山口男爵夫人、江木知事夫人を初として、二百餘名、會長賀屋鎌子氏の勅語奉讀、慈善學院長北村藤三郎氏の育兒談、神道講師足立虎之輔氏の教育と衛生、賀屋鎌子氏の貞節と經濟、修道校長山田養吉氏の修身談等、いづれも有益なりきと。▲横濱市の木村恭子氏外數名發起となり、昨十四日横濱會館にて、女子教育講談會を開きたる由、演者は大谷嘉兵衛、島田三郎、周布公平、下田歌子、松本榮子の五氏なりきと。▲横濱女學校の教育演說會は昨日午前一時より、横濱會館樓上に於て演說會を開き、三輪田眞佐子、安井てつ子等出席し、尚生徒の製作品を展覽し夜に入ては音樂會を開けりと、▲小笠原島篤志看護婦人會同島にては、赤十字事業の勃興に伴ひ、篤志看護婦人會を設置し、同島委員部第一總會の決議に依り、本部を父島に、支部を母島に置き、毎日曜日、看護婦講習會を開くこととなり、其の講師を同島醫師井上隆吉、外二名に囑托せしと。▲大日本食物會發會式石井奥村二氏の發起に係る大日本食物會は、いにし四日京橋鈴木町の石井割烹教場に於て發會式を行ふ筈なりと。

●女學校（ぢよがくかう）の消息（せうそく）

日本女子大學校の入學願書は來年四月まで何時にても受理する由。これは女子は男子と異なり、地方より上京するものは、急に準備の整はざるべきを思ひてなりとぞ。入學願書には（無試驗のものを除く）受驗料金一圓と履歷書を添ふべき筈、また入學の許可を得たるものは、入學金二圓を要し、授業は、一學年金二十七圓五十錢にて、一ヶ月二圓五十錢づゝ分納

の事、其の他校費として一ヶ月五十錢を要す。各部の學科課程左の如し。

一、家政部

(倫理及社會學) 實踐倫理。倫理學。實踐社會學。
(心理及教育) 心理學。教育學。保育學。家庭教育。兒童研究。童話研究。
(生理及衛生) 生理學。衛生學。家庭衛生。婦人衛生。社會衛生。看病學
(應用理化) 家庭應用理化。食品化學。
(家政及藝術) 衣。食。住。社交。女禮。家庭美術。園藝。
(經濟及法規) 經濟學。家庭經濟。帝國憲法。民法及諸法規。
(体操) 普通体操。遊戲体操。教育体操。容儀体操。

二、國文學部

(倫理及社會學) 實踐倫理。倫理學。實踐社會學。
(心理及教育) 心理學。教育學。保育學。家庭教育。兒童研究。童話研究。
(國文) 散文美文講讀。作文。作歌。文典。修辭學。文學史。
(漢文) 經書史文講讀。
(美學) 美學一斑。
(哲學及哲學史) 哲學總論。東西哲學史。
(歷史) 國史。
(体操) 普通体操。遊戲体操。教育体操。容儀体操。

三、英文學部

(倫理及社會學) 實踐倫理。倫理學。實踐社會學。
(心理及教育) 心理學。教育學。保育學。家庭教育。兒童研究。童話研究。
(英語) 散文美文講讀。作文。文典。修辭學。文學史。
(國文) 講讀。文法。
(美學) 美學一斑。
(哲學及哲學史) 哲學總論。東西哲學史。
(歷史) 外國史。
(体操) 普通体操。遊戲体操。教育体操。容儀体操。

以上教授時間は、各學部を通じて、一週二十一時間、また去る廿日創立委員會を小石川の三井邸に於て會を開き大隈土方の兩伯、岩崎男、兒島、內海等の諸氏出席し、附屬高等女學校の建築も、來年四月には落成の豫定に付、開校手續等の事に關して、協議したりと。▲女子高等師範學校にては、明年四月入學せしむべき文科、理科、技藝科生徒二十九名を募集する由にて、左の資格に該當するものにして、各府縣の薦擧に應ぜんとするものは、來月十五日までに、履歷書体格檢查書を添へて、願書を府縣廳に差出すべしと。

△身体健全品行方正の者△師範學校女子部修業年限四ヶ年の高等女學校卒業生若しくはこれと同等の學力を有する者△年齡十七年以上二十二年未滿にして夫を有せざる者△其府縣在籍若くは寄留者

長野縣小諸郡上田町に郡立上田高等女學校を設置し、明治三十四年四月より開校の件認可せらる、▲秋田縣秋田市中島町に、秋田縣高等女學校を設置し、明治三十四年九月より開校の件認可せらる。▲神奈川縣橘樹郡程土ヶ谷町に神奈川縣高等女學校を設置し、明治三十四年四月より開校の件認可せらる。これは、一旦當

事會にて、横濱市扇町に決定したりしに、郡部議員より程ヶ谷説を持出し、知事之に賛成して、急に一變したるなるが、地價に就いて彼是聞ゆるは聞苦し。▲神田橋外の東京府第一高等女學校は、去明治廿九年小松宮妃殿下の三年町にありし御住居を拜領して、改築したるものなるが、今回市區改正のため、築地の元中學校跡へ移轉する事となり、從うて現校舍は不用に屬する筈なれども、さりとて之を賣却せんは畏多しとて、昨今其の處置を評議中なりと。▲新潟縣長岡町に古志郡立高等女學校を設置せんとて、目下計畫中の由。これは昨年同郡會に持出されしも、規模狭小なれば、追て時機を見て完全なるものを設立すべしとて否決となりしを、今回教育會よりの建議もあり、かたぐ再び計畫に取掛れるなりと。▲高松市六番丁なる私立高等女學校は、去二十三年の創立にて、本年は十週年に相當する故、去月末盛なる紀念式をあげたりと、▲小倉市紺屋町に私立高等裁縫女學校といふもの設けられ、去月末開校式をあげたる由、▲豊前大分町の私立大分裁縫傳習所は、是まで裁縫のみ教授し來りしが、此の度小學校令に準據して、普通學科をも授くる事とし、知事の認可を受けて、去月末開校式をあげたり、田中視學官も臨席して、祝詞をのべたりと、同所長は岩田英子氏、▲和歌山縣師範學校女子部卒業生、今日までの總數五十八名の内、制規の通五年の義務を終へたるものは、十八名内在職者八名、二年の義務を終へたるものは、十九名内在職者十四名、二年未濟のもの十一名なりと、▲豊前中津町二三の小學校長は、女教員養成の目的を以て、受驗準備夜學といふを設け、本月八日より授業を初めたる由、即ち尋常小學校准教員檢定試驗、若くは大分縣師範學校に設けられたる、准教員講習科の入學試驗に應ぜんとする女子に、必要の學科を教授するなり、毎週月水金の三日、午後七時より十時まで、科目は教育算術地理歴史作文月謝は一ヶ月十錢、

●體育の發達は、先づ洒掃應對より始むべし。

「こは前に報ぜし如く、去る六日日本体育會の女子部例會に於て、醫學博士三宅秀氏の演説なるが、諸孃の最も注意せざるべからざる一節を、左に掲ぐ」

體育を進めるために運動を奬勵するのは、一應尤もでありますが、併しこゝに考へねばならぬ事がある。たとへば病氣に付ても、其治療法を講ずる前に、必ず其の病の原因を究めねばならぬ。所がこの原因といふものは、容易に分るものでない。或は何病の原因は何々と一般の醫學者が信じて疑はなかつた事でも、意外の事から其誤を發見するなどの事は珍しくもありません。

さて、日本人の體育は幼稚である、宜しく體操を盛にし遊戯法を改良して、大に體育の發達を計らねばならぬと論じて居る人は、果して體育不發達の原因を十分究められて居るのであるか。もし之を十分究めずして、即ち衣服食物住居氣候、其他の事に、何の考をも費さずに、漫然運動せよ〱と責めつけるのは、恰も嫌疑者を捕へて拷問する○。○。○。○。やうなものである。或は眞の罪人、又は連累者が意外の邊に無いともいひぬ。

それならば、私の見る體育の罪人は何であるかと問はれるなら、私は體育の罪人は文明なりと御答へ申します。文明のために、人が奢侈に馴れ、安逸に流れ、遂に柔弱に陷るのであると申します。御覽なさい、電信電話滊車滊船、座ながらにして千萬里外の用事を便じ、家に居る思ひで山へなり海へなり旅行ができる。是等はいはゆる文明の利器でありますが、私は、文明の利器は我々の身體を削る刄であると思ひます。多くの例をひくまでもない。新領土の臺灣人を御覽になれば、山野を跋渉する蕃人の身體が、いかに健康であるか、いかに各部が均一平等に發達して居るかを知る事ができませう。

私が曾て旅行して宿屋についた時、下女が鞄や帽子を運びかけましたから、私は叱り飛ばしてやりました。自分のものを始末するだけの手足はあるといつて。すべて、宿屋に限らず日本の中以上の家では、周圍から成るべく運動をさせないやうにし、すぐ坐右にあるものも人に命じで取らせるといふ風であるが、甚だ間違つて居る。いくら召使が澤山あつても、手足の動く間は、自分の身體を自分で始末するのが義務であります。それでこそ身體の各部が均一に發達するのであります。體育

を奬勵しまするには、體操よりも遊戯法の改良よりも、まづ手近の一身の始末、洒掃應對などより初めるのが至當であらうと思ひます。此點に付て、西洋人はよく勉めます。

●看護婦試驗　東京府に於て、執行する看護婦試驗は、筆答試驗本月十二日より十六日まで實地試驗二十六日より三十日までありと、

●教員保姆定期檢定　大阪府にては、いにし二十三日より第一師範學校に於て、小學校教員、保姆の定期檢定試驗を行ふ筈なるが、その志願者は、總計三百六十八人にして、內譯左の如し。

高等本科正教員男十五人、同准教員男二十五人、女十人、尋常本科正教員男七十二人、女十七人、同准教員男六十五人、女三十三人、專科正教員男七人、女八十二人、保姆七人、合計男百八十四人、女百四十九人

右の內小學校令改正の結果、資格消滅したる專科准教員にして、今回更に同科正教員の檢定を受くる者五十七人ありと。

●小學教員紹介所の計畫　各小學校とも、教員の不足に困却せざるは無けれど、其の志願者は、全く無きにあらず、依て東京府教育會にては、今般相互の便利を計り、雙方の間に立て紹介の勞を取る事となり。先日の議員會に於て、旣に之を決し、目下實行の計畫中なれば、孰れ遠からず好果を得るに至るべしと。

●日本看護術の進步　近着のロンドン、メールは、日本に於ける看護術の進步と題して曰く、

吾人は今回の北淸事件に就き、日本軍隊の眞價及び、日本人に關する凡て事實を知悉するの機會に遭遇せり、就中、日本看護事業に於て、多くの看護婦が、其の特別智識に於て、其の活潑なる行爲に於て、毫も歐洲婦人に比して、遜色なきのみならず、特に其の親切懇到なるの取扱ひと、病院組織の整頓せるとは、外國傷病兵の一たび之に入りたるものゝ感歎措く能はざる處なり、過去十有餘年までは、見るに足らざりし日本看護事業が、斯くまでに進步したりしとは、吾人夢想せざりし處なり云々。

●女生徒の袴　文部省學校衛生主事三島通良氏の談話に曰く、

女生徒の袴は、一体數年前、私共の盛に主張したるもので、今日この樣に普及したのは、誠に喜ばしい次第だが、此處に一つの改良せねばならぬといふのは、袴の丈の、餘に長過ぎる事です、袴の長くなるのと共に、衣服の袖も長くなり、素人目には格好の宜い樣に見えもしようが、長袴を胸高くはくために、胸部に帶を占め、紐を括るに至つては、由々しき大事で、婦人の胸は何んなに大切なものであるかを是非考へて貰ひたい、我々の袴を必要とする譯は、衛生的に優美であつて、而も活潑な發育と体度を望むからの事であるから、袴の丈は是非今より短くして、自然低く着けて欲しい、袖とても同樣です云々。

●最古圖書館の發掘　米國ペンジルバニア大學より派遣したる修學旅行の一團は、土京コンスタンチーノプル近傍ニッハー地方に於て、太古の圖書館を地中より發掘したる由、近着の米國新聞に通信せしが、其の既に發掘し揚げたる圖書は、重に歷史文學の書にして、部數は、一萬七千冊、孰れも紀元前二千二百八十年以前の出版に屬する、太古の書籍にして、其の未だ發掘せられざる書冊を悉皆取り揚ぐるには太約五年を要する見込ありと云ふ。若し以上の通信にして、果して事實ならんには、往古の文華の中心たりし、埃及の圖書も、尙且つ及ばざる大圖書館にして、太古の文物は是より更に一生面を開くに至らん。

●茶話會　日本女學校一年生が、去ぬる十月十日の午後三時に開かれました第一回茶話會といふのに、妾も招かれてまゐりましたが、非常におもしろい樂しい會でござゐました。十二三でもあらう、極めて明晰である上に何處となく愛敬づいた音聲で、ツイ一寸開會の辭を述べられたが、先以て、天眞爛熳たる是らの人々の會の如何に樂し

からうと想像されました。サア皆樣唱歌をうたひませうと可憐なる司會の發聲につれてうたひ出したる『秋の野邊』

見渡す野邊の秋げしき　七草千草花さきみだれ
吹く風かをりてむく緒にほふ　見わたす野邊の秋げしき
見渡す山の秋げしき　高嶺は風に紅葉をちらし
麓は照る日にこのみをさらす　みわたす山のあきげしき

これより、例の司會に紹介せられて、修身や、歷史の時に聞いた賢女節婦のおはなしを爲たもの一二三人、幼稚はなれぬ言語で、いづれも、皆、簡單であッたが、却ッてひとかたならぬ感興を與へられました。諸先生の御談もあッたが、お斷はれたのが、多かッた。時間の無い故であッたらう。次に、お茶お菓子の御馳走。この時、隣室で箏を彈ぜられた。如何お孃さまが、マア如何にかわいらしい指尖のすさびだらうと非常にゆかしう思はれました。次に、福引、妾は商人でござりますと、半紙一枚をおしひろげて口のあたりまでさゝげて、髮は稚兒髷に、顏は、梨の花が春の雨を帶びた時の色で、豊に笑み溢れさうな頰顋のあたりに愛敬を湛へて壇の上に立ッた生徒がある。是はまだ十歲十二といふ程でございませう。一番から十五番まで當籤の人を尋ねて、サテ、これから差上げまする品でござりますが、如何程に御買下さいませうか。尤も代金のことは、何十年後に御拂込にありましても苦しうござりませんが。それでは、あまりに廉價でござります。何卒いま少し高價など、何人か教へたのでせう。巧に賣込まれて、起上小法師一が二百七拾五圓、宮島先生の襪の片方が七圓廿五錢で賣買されましたが、壹萬二千圓拂はうといはれた品が、カンカラ太鼓であッたのなども、隨分廉價はなかッた樣でございました。川崎先生の鳥打帽、三輪田先生の御袴も意外の高價で

賣買約定濟になッた爲に、御歸の節には無期限で借りて御出になッたさうな。これより、一同案内されて校長室にまゐりますと、其處には、活人畫。春日局微行して駿府にゆかるゝ所、まことに畫の樣にして顔を白地に顯して居たなら、女のお子がと、却つて觀る方で恥しかッたらうに、是は、笠を面深に、しかも、側向であッたから、然樣いふ心配もなく、麟祥院と境を接して居る學校の生徒の考案としては至極な思付と一同の感をひいた樣にございました。音樂室にて、宮崎先生のピアノの彈奏、何といふ曲だらう。始めて聞きましたが、實に、面白いことでござりました。終にピアノ伴奏で、生徒一同で『集會』といへる唱歌をうたうて、閉會せられました。いかにも、其の唱歌にいへる如く

あなおもしろの　今日のむしろ
あなこゝろゆく　この日のまとゐ
おもふともどち　袖かいつらねて
むかしをしのび　今をかたり
たがひにつゆも　こゝろをおかず
おもふことゞも　いひかはしつゝ

さぞ生徒も樂しかッたらう。席末につらなッた妾達も、近來たえて無い樂を仕ました。斯樣いふ會は、樂しい樂しい非常に樂しい間で、自然、洒掃應接の禮にもなれ、有益な談話をも聞き、其の他、何やかや、後々のため、莫大な利益を得ることが出來ますから、何卒か、健全に發達して行くことを祈ります。若し時間をくりあはせて、一時頃より開會し、來賓のためには、この頃の會ぐらゐの時間にてよしとして、生徒のために今少しの時間を與へたならばと思はれましたが、其の邊は學校の御都合もあることでございませうから。

（なほ子記）



教の庭

十一月五日兼題

奉祝天長節

甲府山田町　名取正代子

天つ日のてらさんかきりましませと
きみかみあれをいはふけふかな

長崎市西山七十一番戸　日高かす子

今日といへばやしまの外のくに人も
わかおほきみの千代いはふなり

上總國鶴舞町　高石登代子

いかはかりよき日あるらん大きみの
あれましゝとふけふのよき日は

三河國豊橋町　加藤籌子

年のうちの三日のひと日ときくの花
たてまつりてもきみこそいはへ

近江國犬上郡彦根町大字二番　齋藤駒尾子

あかはまの眞砂のかすをかそへつゝ
あまもいのれりきみが八千代を

（以下原稿到着順）

みめくみのつゆにうるほふ民くさの
しけりあひつゝきみいはふなり　田代艶子

み光りのさしてかしこき今日はこそ
千代に八千代にいはひまつらめ　田代綾子

千代ませと菊のひと枝をさゝげつゝ
御かげをろかむこのあさけかな　本庄のふ子

君か代のかきり知られぬ御さかゑを
ことほきまつるけふのうれしさ　目黒佐喜子

よろづ代をしつの乙女もよひあけて
おほみひかりをあふくけふかな　山田よれ子

おほきみのあれましゝ日を祝ふらん
千鳥のあしに波もたゝせす　竹村竹里子

君か代をいはふけふこそ五千よろつ
たみのこゝろもひとつなりけり　久野春子

九重のみそのに生ふるしら菊は
きみか八千代のはなにや有らん　久野久利子

おほ君かふかきめくみもわたる世を
八千代のきくのつゆにしるけれ　久野てふ子

すめらきのさして給ひしうまし日よ　福原菫子

いさやいはゝん御はたおしたて

あれましの今日とて鄙のはてまても
みはたなひかぬひとつやもなし　松尾くに子

さき匂ふ八重のしらきくをりかさし
きみか千とせをいはふけふかな　仁保志麿子

立ちならふあさひのみ旗さし〱に
かすそふ世こそめてたかりける　萩原章子

おほきみの生まれ給ひしよきひとて
しつやまかつもちよよはふなり　金山ゆき子

日のみはた高くかゝけてすめらきの
あれましゝけふをいはふくに民　關　勝子

君か代は千代にやちよとをさな子か
もろこゑたかくうたふけふかな　岩波のち子

もろ人かきくのさかつきとりとりに
きみか代千代といはふけふかな　岩川后子

君が代を千代とことほくこゑこゑは
とつくにまてもなりひひくらむ　岩波はま子

山かつもいそやの海人もおしなへて
きみかちとせをいはふけふかな　永井さい子

かどことに御旗かゝけてあふくかな
神あれましゝ今日のよきひを　高砂き代子

祝へおみあふけたみくさあま照らす
かみの御すゑのあれましゝ日を　高砂菊代子

おほ君の御代とこしへとさしことに
今日のよき日をいはへもろひと　高砂恭子

君かよはちよにやちよにくにひとの
ことほくこゑもはてなかりけり　丹下花子

とこしへにみさかえませとおほ君の
ちよをうたはぬひとなかりけり　川島さく子

けふといふ今日の此日のなかりせは
なにひらけけんこの御代のこと　杉山ひさ子

大きみのしろしめしゝをいはひつゝ
今日のこの日はくれすも有なん　草賀きりの子

かけまくもかしこき君かみさかえは
あめつちのむたときはかきはに　立原よれ子

日の御子のあれましゝ日と讃しみて
みはたかゝけていはふしつか家　齊木たま子

けふの日を祝ひまつらむきくのはな
きのふのつほみゑみさかえつゝ　松原かつ子

あめつちとなかく久しくおほきみの
さかえいませといはふけふかな　鏡山増代子

君かよはけふをくいひのたるひそと
のきのみはたそよもにかゝやく　鏡山靜子

あれましゝけふのよきひを大きみの
さかえとゝもにいはふもろひと　武田龜子

日のみこのあれましゝ日を祝ひ奉る
みはたのかけはくにゝみちけり　服部倫子

大うちやまのぼるあさ日の旗たてゝ
みあれをいはふよろづよのこゑ　友永章子

かげたかき君が代千代に八千代にと
今日をいはひてたみぞよろこぶ　德永廣子

天ながくさかえさかゆくおほきみの
今日のいはひぞいとゞめでたき　德永識子

皇國のたかきみいつをさかえませと　那須昌子

あれましし日をいはひまつらん

あれまし、日がらなりせば外ひさも
御はたをあげていははぬはなし　黒田明子

たかだかに御旗かゝげてすめらぎの
いく日のたる日いはふかしこき　佐々小琴子

山かつもしほくむあまもはたゝてゝ
いはへやいはへ今日のよき日を　佐々有鄰子

あれまし、神のみすゑのさほながく
たふさみあほぐ今日にもある哉　講口貞子

大きみの御かげあふぎてあれまし、
けふのよき日をいはひまつらむ　松尾富美子

たぐひなき御代の稜威を千代かけて
みやこもひなもいはふ今日かな　松尾せい子

稜威仰く御代をかしこみおしなべて
ひなもにぎあふひのまるのはた　荒井美和子

君が代をいはひまつりていへごとに
たかくるゝぐろ日のみはたかな　荒井滿武子

今日さいへは廣き國内によろづ代を
こゝほくこゑのうらにさゞめく　持地桃枝子

日の御旗たかくかゝげてけふの日を
おなし心に祝ふたみなか　森このゑ子

玉しきのみやこもひなもおしなべて
みかげあふきていはふ今日かな　池澤昭子

おほ君のあれまし、日さのきごさに
みはたかゝげて千代いはふなり　池澤天與子

懸まくもあやにかしこきおほぎみの
御かげをあふぐ今日のさやけさ　寺本いし子

かぎりなきわが大きみのおほみよを
さつくにひさもいはふけふかな　戸賀崎治子

あまさかるひなの賤男もはらつゝみ
うちてぞいはふきみが御代かな　高橋松江子

さこしへにひかりも清きあま津日の
かゞやきそめし今日ぞうれしき　平野文子

くもりなくのぼる朝日さもろさもに
きみが代いはへよろづ代までも　中川芳尾子

日のみはたのきにかゝけて大きみの
あれまし、日をいはふけふかな　毛馬内優子

かしこみていはひ奉らむおほきみの
あれまし、日の今日のよき日を　北島松子

みれ高くさしいでてまし、天つ日の
あふみひかりをあふくけふかな　北島功子

高ひかるはつ日のみこのかしこくも
あれまし、日をいはふけふかな　北島棣子

のぎごさに御はたかゝげて君が代を
こゝほきまつる今日の目出たさ　花岡福子

さしのほる朝日さもにおほ御代の
千代よろづ代もさかねますらん　秋山よし子

大きみのめぐみにしげるたみくさの
御代よろづ代さいはふ今日かな　德永萬壽子

大きみのあれまし、ひをたれもみな
いはふこゝろやひさつなるらん　戸倉信子

鶴かめのちよ萬よもかぎりあれは
おめつちのむだきみをいはゝん　鎌田きよ子

いよゝ世にさかねますらんおほ君の　和田德子

千代のいはひもいくかへりして

現つ神みあれましけんけふさいへは
やしまのほかもあふかぬはなし　金原玉城子

日の御旗高くかゝけてさこしへに
きみの千させをいはふけふかな　尾倉益子

君か代を千代に八ちよさもろびさの
うたこゑたかくいはふけふかな　宇高松子

たれもみな祝はさらめやおほきみに
きみのちさせをさゝけまつりて　藤井りゑ子

大きみの千代をかなつろまつかぜに
なひくはけふの御はたなりけり　河野みち子

こゝのへのけふのみほきのうたけ祉
きみは八千代さいはふもろひさ　佐藤保子

のきこさに御はたかゝけておほ君を
いはふ今日こそかしこかりけれ　田村多豆子

かたくなの田舍おきなももれさるは
御はたさゝけていはふけふかな　村上操子

きみか世を千代さうたひて祝ふかな
あまつ日つきはよろつ世なれさ　上原信子

みめぐみにもれぬしるしの日の御旗
たてゝぞいはふひなのはてまで　鍋田龍子

天つ日嗣あれましゝその日のみはた
たてゝいはゝぬくになかりけり　河合縫子

大きみのちよをこさほぐけふさてや
きくのはなさへゑみてみゆらむ　縣靜子

さつ國もかけててらせる日のみこの
あらはれましゝけふをこそ祝へ　三宅中枝子

大きみをちよさいはへははなさきて
きくもにほへるけふそめでたき　服部萬子

あれましゝ其日いはへの御しるしの
きくのはなさへさきてにほへり　服部正子

十一月五日兼題

菊をめつる詞

天　伊豫國松山市一番町　宇高松子

咲きほこりたる千草の花も、やう〳〵色あせて、あさましくありゆく庭に、たゞ獨おくれて咲匂へる菊の花ばかり、あはれにゆかしきはあらじかし。其の姿の清く、香の芳はしきはいふもさらなり、よく露霜にたへて、にほひいづる雄々しさは、花の兄とたゝへらるゝ梅の操にも、いかでかおとるべき。ましてよにあく盛り久しき花なれば、古より君がよはひを千代とことほぎ、あるは下露を結べば、老もわかゆなど、もてはやすもとり〳〵めでたしや。殊に、いはまくも畏こき御あたりの御しるしにせさせ給ふこそ、世にたぐひなく、いといと尊けれ。哀いひしらぬ花の匂ひにもあるかな。

地

神田區駿河臺甲賀町八番地　金原玉城子

きくは山入の住家にさきて、露のまにちとせへにけんともよまれたり。雲ゐの庭に、さきたるをは、あまつほしかとまかへられ、いにしへのかしこき御代にも、みまへにてきく合せのみあそびのをりのすはまにうゑられたるを、よせてかへらぬ浪かともよまれしときこえぬ。近き世とありては、さま〲のつくりものにたくみ出て、人の形あるはきるものにも色とりしたるを、めもあやにしあして、あまたの人に見する處ありとはきくものから、見るとてもいでたゝずかし。

わが學のやにも、さつきのころほひ、根わけしてうゑたるを、わけくれいたつきて、おほしつるが、此頃咲始めたれば、露よりさきに、おき出でつゝ、よはにも、月あきをりは、ともしびかゝげつくして、めではやして、

雲の上に住む心地してうれしきは
　　ほしにまかへるよはのしらきく

あそびとりこちつゝ千代のよはひをのべつゝをるぞかし。

人

山形縣最上郡新庄小田島　小山つや子

野邊の千草も、おく露霜に枯れはてたるに、ひとりいとほこり顔に匂ふは菊にぞありける。唐のひじりも、此の花を四君子の一とめで、又此の花を小かめにさして、千代の齡を壽きあへるもうべとこそおもほゆる。大既の花は、雨露にうたれ、見ところあきさまにありぬれど、此の花のさりげなく、秋のかたみに咲のこり、其の色の清あると、其の姿の氣高く雄々しきとをこそ、かくはめでたゝへつるあらめん。すべて花は、造りたるより、造ろはで咲たるぞよけれ。中に菊は、あれはてたる垣根の中に、おのかむき〱咲匂ひたらむこそ、一入めでたけれ。あはれ草木にてすら、かく世の人にめではやさるゝをや。まして世のをみなたち、少はかゝる操をまもり、たはまず折げぬ心もて、世にたゝんには、いかでか、世の人のそしりをうくべきや。

（以下原稿到着順）

福原菫子

稍々秋も更け行て、垣根にすだく虫の音さへおのづからよわり行く昨日今日、前栽は霜枯れたれど、百草の花のさちめさ、菊の花のみ獨りおくれて、千させの色に吹き出でたるめでたさ、淸らなる香は、たさへん方なく中々に身も心も浮き立つ許りなり。殊に

此の花は、霜にゝ時雨にも、おれずうつろはざるあはれの操さへそなはれば、文よむ窓のもとに、一枝さして、常々おのが友とせばやと、獨りごたゑゝも、げにうべなりけり。

關　勝子

ふせやのほとりに住める人の愛子にて、今年二八になむなる少女ありけり。然るに、此の少女いかなるゆゑなるか、菊をめづる事大方ならず、然れば、庭もせにうゝるは、まをすまでもなけれど、じゆばんのゑりおびの模様、あるは、手ぬぐひまで、此の花の付かざるはなしとかや。ゆゑに人よびて、きくむすめとこそはいふなれ。げによろづの花の内にて、此の菊花ほどめでたき花はあらずかし。なにとなれば、萩きちかうは、同じ折に咲初しものから、くれゆく秋ともろ共に、美しき色も香も、はてはみごりなるはにいたるまで、あはれになりもてゆくなめり。さるを此の菊ばかりは、ひとり冬ふかうなるまでのこり、雪霜をしのぎて、ときはの松と千代くらべをなすめり。さればいはむは、いといとかしこけれど、我が　皇室にても、この花の操の正しきをめて給ひてわざと十六ひらなるをゑらみて、御紋章とはし給ひつるならむ。あはれ敎の庭のなでし子らよ。をしへ草のなすがまに〳〵操正しういそしみはげみて、打まなびなば、やがては此の菊花の如く、九重の雲井の御庭にのぼらむことかたき事にはあらじ。されば、たゆまずうまずまなべよかし。はげめよかし。世のなでし子たちよ。とかく年はもゆかぬ己のかゝる事いはむは、いとおこのきはみなれど、こも菊をめづるあまりに出しざれ事なれば、いかで世の人なまいきなりとなとがめたまひそ。

高砂八代子

野分吹き渡り、千草枯れ果てゝ、庭の面いと淋しう成りにける。獨りたわゝに咲き殘りて、人のこゝろを樂ましむるこの菊にまさるものやはある。其の香の清く高きを愛するも、亦うべなりけり。さるにても、世の人、其のけはひをのみめでゝ、露霜にたへて咲き殘りたる操を慕はざるは、いともあやしき限りになん。

丹下花子

限なきよはひのみかは、見るからに心ものぶる白菊の花と、昔の人のよみたまひしも、げにうちそよぐ風は、いつしか暮れゆく秋のあはれをつけ、庭の八千草の花は霜かれ、木々の紅葉はうつろひゆく頃しも、ひとり菊のみ盛りひさしく、たぐふかたなき色香ぞめでたき。されば昔より、菊の下水を結べば若ゆとも、老せずともいひ傳へ、或はまた垣根に匂へる菊の白露に、朝日のきらめき、夕露のおきわたしたるに、月のやどれるなどは、一入あはれまさりてなつかし。

八千草の花てふ花の君ならん
　匂ふもたかき白菊の花

立原よれ子

桐の一葉にさそはれてより、いづこもおなじ秋のけはひ、心なき身にも何となうあはれを覺ゆる折から、露にやたわむらん。霜にやおごるらん、その姿こそかよわけれ、その操の堅きは、實に菊にぞありける。さるをひたすらその花をのみめでゝ、その操をもてはやす人すくなきは、そもいかなる故にか、音にのみ菊に名たゝる團子坂のは、ねも知らず、野べの白菊なんどなか〳〵におもむきぞおほかる。殊更に雨霜を避くべき設けこそせれ、變はらぬ色は、今の世の女の鑑ともすべし。さて今の世は、便りよしなどゝ打ちさゞめきつゝ、ひたすらその花をのみ見んとて、都へのぼる人もありけり。あはれ心なの世の人や。

音にのみ菊に名たゝる團子坂
　のぼらずもがな野べの白菊

松原かつ子

春はよろづに陽の氣さかりにて、にほやかに艶なる櫻花に青柳こきまぜて、更にまたそれと、色香あらそふ花も多かれども、秋はただ菊花こそ勝れたりける。黄なる白なる、いろ〳〵に咲き匂ひて、稱ふる名さへもおぼゆまじきばかり、かず〳〵の品多かり。かしこき御あたりにも年々には菊の花壇をみそなはせ たまふとかや。菊もさこそはゐあることとならめ。われら賤が伏屋にも、まがきに一かぶ二かぶ植ゑて、ながむるも、なか〳〵になかき花にてゆかしくぞある。いつぞや文にてみし、

よの中にてらはぬいろを操にて
　　心なかくもにほふしらきく

とありし歌の心も、思ひ出てらるゝなり。またをちこちには花壇しつらへるあり、きく人形あり、種々さま〳〵に造るもあり秋のあはればきくにてきゆるにや。

德永廣子

四方の草葉も、はやかれなんとする秋より、冬かけて、うるはしく人の心をいさめ顔に、さきかざしぬる菊花ぞ、いさめづべきものとおとはるゝ。今朝はとく起いでてみれば、まがきのもとに、白菊の露をかざしながら、みさをの色をまもれるさま、皇國心の花とこそみゐにけれ。如是、菊はゆかしげなば、小枝にさく花にありながら、人をしも感ぜしむるに、まして萬物の長たる人に生れしものの、この花にさへおとりぬるは、口惜しきわざなり。つとめてみさをを守り、大和處女の道をたつるこそ、いと目出たけれ。

佐々有鄰子

旭の影さやかに立のぼりて 籬のうちの黄菊白菊、濃紫うす紅、とりどりの花、研をあらそひ露をかざし、風にかをりぬるさまは、唐土人ならねど、隱逸の情むねにうかび、心にきざみて、此の園の風雅の、いろ〳〵、目につき、立ちさりがたく、またもとの見まほしくなん。

森　このゐ子

春は花、秋は紅葉といひなせど、それにもましてなつかしく、又、ほまれ高きは、げにこの花にぞある。四季のうち、大方花のちり過ぎしわひしき秋をかこつ頃より、咲き初めて霜の光りを添ふまでも、根さし枯れせぬ菊の花、ちるといふことを知らぬゆゑにや。ふるくより皆人のもてはやすこと、一方ならず。また、貴人のみ垣をまもるにも、野山の景色そふる花も、それ〳〵に、風情そはりて、うつくしくまた殊さらにうゑつけし畑などには、様々に交り咲きそろひたるは、あだかも五色の涙のうちよするかと見ゆるなど、いづれか美ならざらむ。またその香のにほはしくなかなかにさびしき秋も捨てられざる心地するなどは、只この花のたまものなりけり。

藤野茂子

秋いよいよふかく、夜ながの折から、よむふみもうみたるまゝに、まどおしひらきながむれば。あななづかしの白菊や。此のきくよ。千ぐさもかれ、虫の音もよはりはてたるあとにのこりて咲きいでたるあはれ、何にかはたとへまし。おく白つゆはしら玉かとばかりに見ゐ、しもにもかれず、その氣だかきこゝろこそ、いとゆかしけれ。あはれ人もかくてこそ。

藤野節子

花といへば、人はまづ櫻といはん。われはいはじ。などそれにおとるべき菊とこそいはめ。此の花よ。霜にかじけず、風にもなれず、秋の千草の中にても、わけてあはれふかく、月夜ながめは、一しほにおぼゆ。冬ふかくひとりおくれて、にほひいでたる。あるは雪と、あるは星に似たる、などゝうた詩にもよくよまれ、人の心をひく事、いみじうふかゝり、

その諸花にすぐれたるこそ、げにめでたきかぎりなれ。我がにはのやれがきの本に、三つ四つ五つ此のごろにほひいでたる、あはれふかくも、はためでたくて思ふふしなかくなん。

寺本いし子

耳になるこの音をも聞す、目に旗手のまねきも見ぬ大御世にあひては、何事につけても邳しとうらみかこつべき事やある。千草にすだく虫の音は、秋きぬとつげ、四方の山々かれ果てて、さびしくなりつるを、この花ひとり後れ咲き出て、霜におごる。うべやみさを草の名をおびけむこと。されば昔より文歌にものして、めでさる者ぞなき。故に申もかしこき事なれど　天皇陛下の御紋にまで、御用ひ遊ばさるとかや。なほもろこしの陶淵明となん云へる人は此の花をいたくゝめでたりと。げに霜いただけば、身をよそほひ目さね行けば、香ににほふ暗の夜さへてらすなり。あはれまがきの菊よ。たとひいかなるゝ事のあれとて、なが高きみさををば、夢なたがへそ。

平野文子

いずれの木々も、やう〳〵黄ばみわたる頃。わが宿の籬の菊はさきいでぬ。黄なる、白き、赤き、紫なるとり〴〵にいとうつくしく、香さへいはんかたなく、げに仙人もとひ二人ばかりなり。四季をり折りに咲き出つる花は、いとさはにあれど、おのれはいともこの花をめづるになむ。春さく櫻の、大和男にたとへらるゝは、其のちるさまのいさぎよきが故なるめれば、秋さける菊は、やがて、やまと女にたぐふべし。さるは、この花の露にたわみ、霜におごれる樣の其の德とする、外柔に內剛なるにひとしきが故なり。うべ古より君子にもたとへられけん。朝な夕な其の色を見、其の香をきゝつゝ、久しき盛にあへて、よはひのべんとはおもほねれど、已がふ

むべき道の千代のかざしにいざやしてまし。

松尾せい子

富みたる色のはつか草、にほひも淸き花蹊、なつかしけれどいとなつかしきは、この花になむ。貴人の御園に匂ふはうるはし。淋しげなる伏屋の垣におのづから咲けるは哀深し。淸き谷川の岸に黄菊白菊亂れたる、露もかをりてこぼるらん。老せぬ藥とたれかいひけん菊の下水を。實に此花のみは盛久しく、藏床しく、秋毎に八重に一重に色の千ぐさに咲き出でゝ、千歳の秋も榮ゆめり。木枯の吹き荒れたる野邊に、ひとり殘れる霜の白菊は、操正しき人の心とも覺ゆるかな。

村越こと子

霜下のつはものなどゝたとへられ、其花ひらは、千歳のよはひをのぶるなど、めでらるゝは、香をも色をもそなへ、はた霜におくれて匂ひ渡ればならん。唐國にては、黄なるをよしとせしにや。詩などには、黄花とも黄菊ともきこゆるに、我が國にては白きを旨といひけんやうなり。おきまとはせるなど歌にはいつも白菊をなんよめる。誠にませゆひ渡し、霜おひなどして手をつくしたる草々の色よりも、白菊黄菊の、いたく大ならず又むけに小さくもなきを、わざとつくろはて、垣根或は松かげなどに咲かせたる、こよなうをかしうこそ。春咲く梅の花も香ゆかしく、櫻は花の色美しく、桃李は實をめでらる。菊は獨り、荒れ草の中に在りて、霜にもたはまずおれぬ心もて、操高く咲き匂ふこそ、いと〳〵ゆかしけれ。

平塚みどり子

野邊の千草かれはてゝ、吹く風寒く成りぬる頃より、咲き初めて荒れたる垣根をつくろひ顔なる菊の花よ。春の花、秋の草木にも爭はず、秋の深くなるまゝ、かたみに劣らじとさき匂ひ、あはれに

も最やさしう見ゆれど、おきわたす白露の、日に輝くあした、山の端の月かげそふ夕べにもひるまず、久しく匂へるは、心の内に雄々しきこころあるにや。實にけ高うこそおもほゆれ。大方の世に繁しきものにもてはやしつゝ、齢を千代と稱くも、盛の久しき花なればなりかし。菊の下水を結べは、若ゆとも、あるは、老せずとたとへられつるぞ理りなる。はたかしこけれど、昔より九重の御庭に植ゑさせ給ひて、歌によませ時に作らせ玉ひしも、此の花のことに勝れし故にこそあらめ。あはれ草の中にてだに、かゝる目出度ものはあるを、まして萬物のれいたる人に於てをや。殊に女は此の花の如くあらずば、人に笑はれぬべしといたく心にきざみつ。日一日庭前の菊をみてかんぜし事をしるしぬ。

奉祝天長節

高砂恭子

みいつかしこき　大君の
生れたまひし　今日の日を
いはへや／＼　諸人よ
いはへ此日の　目出度さを
日の丸御旗　門に立て
御代とこしへと　いのりつゝ
たかきいやしき　おしなべて
今日の吉き日を　みないはへ

明治三十三年の閏八月十五夜の観月の小宴に集ひてよめる

くもりなき秋のかゞみのなかぞらの
　つきをふたたびあほぐもちの夜　早田俊子

まちまちてまたももなかの月みれば
　ひと夜ばかりはれずもあらなんい　服部倫子

いつしかとこよひをまちしかひ有て
　ふたたびみつるなかぞらのつき　徳永萬壽子

中あきにふたたびながむもちつきは
　かげさへいとどさやけかりけり　徳永廣子

うちむかふ人のこころもおほぞらに
　ふたたびすめるもちのよのつき　友永章子

影さむくめづるもあきのなかぞらを
　ことしにふたたびもちのよのつき　宗盛子

もちつきのかゞみはのちの中あきも
　ふたたびむかふかげのさやけさ　佐々小季子

ひささせにふたたび秋のもなかてふ
　つきのかゞみにむかひつるかな　佐々有鄰子

北清の變　久野久和子

にしのそら雲のゆきかひたゞならず
　支那のやまかぜふき荒れぬかし

出兵を

大きみにこゝろつくしをかためおきて
　いさからねみしうちはらはばや

からにしき大和にしきにおりかへて
　光りかゞやくにとなさばや

軍艦派遣

くろかれのみふれはしらせ武夫らが
　めさすあなたやもろこしのくに

杉山書記生北京城外にて虐殺されけるよしきゝて

あなかなしさらふす野邊を踏わけて

いりにしひとのゆく衛しらすも

たふれしはのちには國のはしらとも
なりにしものをすきやまのきみ

服部中佐塘沽戰死
からくにの露ときえてもきみか名は
外つくに〳〵になりわたりけり

白石大尉塘沽先登
いさましやてる日の御旗高くたて
とうくかはたにさきかけしきみ

管大天津紫竹林戰死
いさましき名をのこしつゝ唐士の
紫竹林にちかしきみそをゝしき

太田大尉天津紫竹林戰死
もろこしの北やまおろしふきすさひ
つゆときえにしあはれますらを

武久大尉罘寺城戰死
雨あられたはしるたまを身にうけて
しこのはみしらうちかへしけむ

小南大尉天津居留地戰死
ものゝふか打出すたまにたふれても
あま津みしろに名をのこしけむ

服部少佐天津戰死
かれてより君にさゝけし露の身の
きえしもをしきはつとりのきみ

河内山大尉天津戰死
かうちやまたかきいさをあらはして
よのためちりしきみそをゝしき

安藤大尉北京籠城中戰死
立こもるしろのいしすゑあやうきを
身にうけたへてちりしきみかも

木内大尉唐家灣戰死
はせにくるあたを追ひつるものゝふか
きえしもをしき唐家灣の里

矢崎少尉攻擊戰死
いさましき鬨の音あけてもろこしの
きたのみやこはきえしきみかも

北京籠城
打よせししこのはみしらなきふせて
こゝろつよくもたちこもりけり

北京進軍
もろこしの北のみやこをせめとりて
さきかけ立して日のもとのはた

秋の虫　　花岡福子
小夜更けて月のみ澄める我が庭の
淺茅生にさえし鈴虫の聲

古戰場
武夫の命を捨てし跡訪へは
すゝきそまねく人見えずして

菊
霜繁き園生は獨り白菊の
かこち顔にも咲初めにけり

大日本食物會規則

第一條　本會は大日本食物會と稱す
第二條　本會事務所は市下京橋區鈴木町拾壹番地に假設す
第三條　本會は汎く食物上一切の事を研究し廣く知識を交換し專ら衛生經濟に注目し料理法の改良進步を計るを以て目的とす
第四條　本會は每月一回談話會を開き演說談話をなし又春秋二回大品評會を開く事あるべし○會日は二週日以前に報導すべし
第五條　會員中食物一切の質問あれば可成調査の上應答すべし　質問書は應答郵劵封入にて送附の事
第六條　會員每月金拾錢を出し業務を贊助する者とす
第七條　總て會員たる者は本會備付の書籍を縱覽し又談話會品評會に出席する事を得べし○但し會員の紹介あれば何人も出席する事を得

東京市京橋區鈴木町十一番地
大日本食物會事務所

明治卅三年十一月　石井泰次郎　奥村繁次郎

我等微力を顧す本會名稱の下に勤勞可至候に付何卒御贊助あらん事を希望す

定價		
一册	拾錢	全國無遞送
六册（三ヶ月分）	五拾五錢	
十二册（半年分）	壹圓	

代金　通貨又は郵便小爲替、銀行爲替及通運便にて御拂込の事拂込は、郵便爲替、拂渡局は東京南富町郵便受取所、受取人は東京南傳馬町一丁目七番地靜思館宛、郵券代用一割增

領收　別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料又は端書封入の事

照會　編輯上に關する件は「東京市京橋區築地二丁目二十一番地國光社編輯部宛」○會計上に關する件は東京京橋區南傳馬町一丁目七番地靜思館宛照會は返信用切手封入若くは往復葉書にあらざれば回答せず◎未知の來書は一切受取らず

明治三十三年十一月四日印刷
明治三十三年十一月五日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛
印刷人 東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木良雄
發行所 國光社
發賣元 東京京橋區南傳馬町一丁目七番地 靜思館 電話本局一千三百七番

廣告 女鑑毎月五日、廿日、發行

明治三十三年十一月五日發行
毎月二回五日廿日發行　第二百拾六號
明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

女鑑

寶石入指環



（一）ダイヤモンド及キャッツアイ入甲價八拾五圓●乙價七拾五圓●仝眞珠及チパール入甲價參拾參圓●乙價參拾圓

（二）ダイヤモンド入甲價參百圓●乙價貳百八拾圓

（三）ダイヤモンド及眞珠入甲價百貳拾圓●乙價百圓

ダイヤモンド入甲價貳百圓●乙價百七拾圓

（四）ダイヤモンド及エメラルド入甲價百五拾圓●乙價百貳拾圓

（五）ダイヤモンド及キャッツアイ入甲價貳百圓●乙價百七拾圓●仝ダイヤモンド眞珠入甲價百八拾圓●乙價百五拾圓

（六）ダイヤモンド入甲價百八拾圓●乙價百五拾圓●仝ルビー及サッフアイヤ入甲價五拾圓●乙價四拾參圓

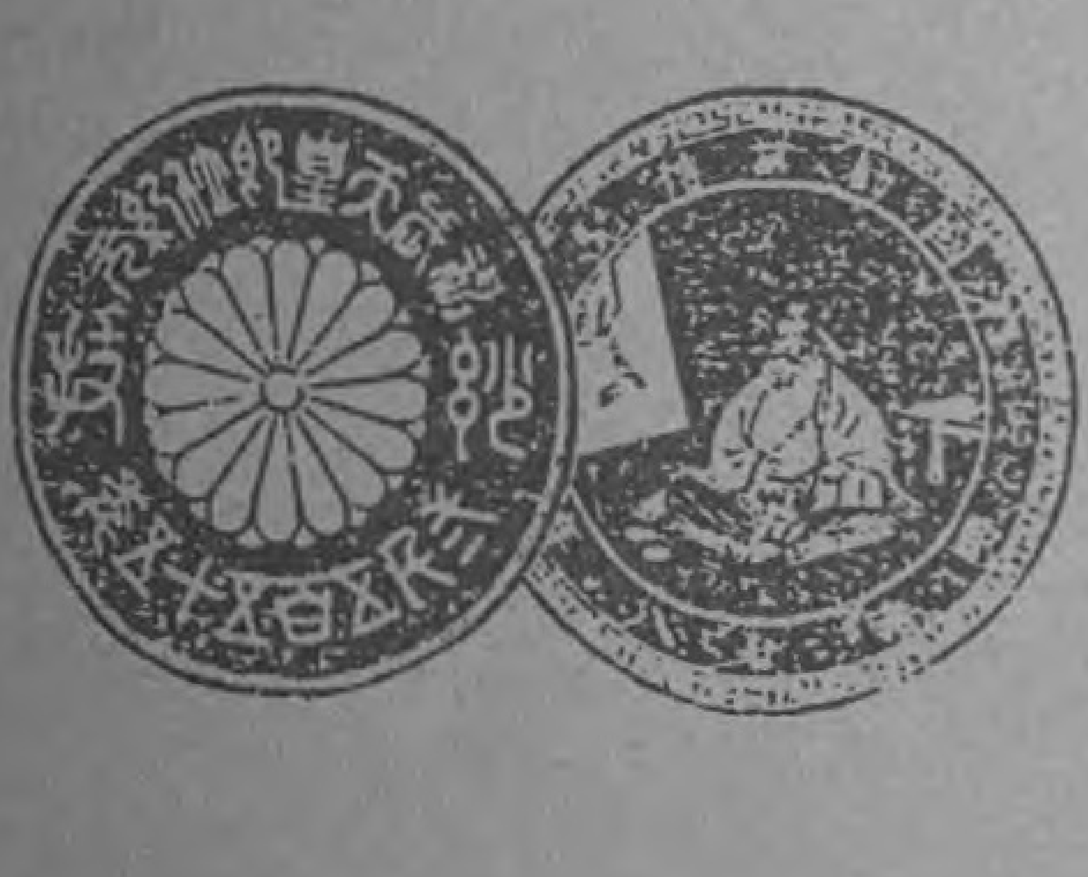
（七）ダイヤモンド入甲價五百圓●乙價四百參拾圓

（八）眞珠入甲價參拾圓●乙價貳拾五圓

●市外遞送料金貳拾錢

此ノ外金又ハプラチナ地ニ種々ノ寶玉ヲ裝嵌シタルモノ及影刻品夥多有之候間御來車ノ上現品御一瞥下サルカ郵便御注文ナレバ寶石入若クハ影刻付等ノ區別ヲ指示シ代金御送附アレバ其價ニ相當ノ品ヲ精撰シテ調進スベシ若シ御意ニ適ハザル時ハ御購求當日ヨリ一週間（弊店商品中時計ニ限リ三十日間）以内ハ（府外ハ相當ノ往復日數ヲ加フベシ）凡ソ其物品ニ破損或ハ毀傷ナキニ於テハ何時ニテモ需ニ應ジテ他ノ物品ト交換シ又ハ原價ニテ買戻シ聊カタリトモ其爲ニ手數料若クハ割引等ヲ加ヘサルベシ其他ノ手續ハ屢々各新聞紙ニ廣告スル所ノ弊堂店則ニ詳ナリ

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地
（電話番號新橋三百三十三）
（長距離電話番號新橋三百三十三大阪東七百卅三）



妙技一等賞牌

時計及寶玉類貴金屬美術品商

天賞堂

東京神田小川町（電話本局二六〇）天賞堂小川町出張所
橫濱本町五丁目（電話八七六）天賞堂橫濱出張所
大阪心齋橋北詰（電話東七三三）天賞堂大阪出張所
名古屋市玉屋町二丁目 天賞堂名古屋出張所
廣島市大手町三丁目六十五番地 天賞堂廣島出張所
熊本市上鍛冶屋町十番地 天賞堂熊本出張所
長崎市今鍛冶屋町四十番地 天賞堂長崎出張所
福岡市橋口町榮屋方 天賞堂福岡臨時出張所
北海道小樽色内町越中屋方 天賞堂小樽臨時出張所